津賀平遺跡

－第２次発掘調査報告書－

2010

鈴鹿市考古博物館

津賀平遺跡

－第２次発掘調査報告書－

例　言

1　本書は三重県鈴鹿市津賀町字池ノ坪 807-1･3･4;809-2･4･5 に所在する津賀平遺跡の第２次発掘調査報告である。

2　現地における発掘調査の期間は平成６年（1994）年７月４日から８月 19 日である。

3　調査面積は 570㎡である。

4　発掘調査は，鈴鹿農業協同組合代表理事組合長杉野喜市と鈴鹿市遺跡調査会代表市川年夫との間で委託契約を締結し実施した。

5　調査時の体制は以下のとおりである。

鈴鹿市遺跡調査会

代　表　　　市川年夫（鈴鹿市教育委員会教育長）

調査指導員　八賀　晋（三重大学人文学部教授）　仲見秀雄（鈴鹿市文化財調査会長）

調査担当者　藤原秀樹・新田　剛・山本保志・清山　健（以上鈴鹿市教育委員会文化財保護課）

事務局長　　石井　平（鈴鹿市教育委員会文化財保護課長）

監　事　　　杉野喜市（鈴鹿農業協同組合代表理事組合長）

6　現地調査は新田が担当し，藤原・山本・清山がこれを補佐した。調査参加者は以下のとおりである。

（現地調査）

伊藤キミ・岩崎つた子・岩崎守・岡田利子・岡田富子・川原せつ子・小林明・鈴木林三・中川義春・林よし子・藤見たかを・前川利之・前田輝雄・前田みつ子（以上シルバー人材センター）・太田久男・神戸勝浩・辻公則

（遺物整理）

浅野和歌子・片岡喜美子・加城陽子・神田梢・杉本恭子・真鈴川千津子

7　報告書作成時の体制は以下のとおりである。

鈴鹿市考古博物館

館長	東口　元
主幹兼埋蔵文化財ＧＬ	新田　剛
副主幹	服部真佳
事務職員	田部剛士・吉田隆史・米川梨香
嘱託職員	吉田真由美・打田知之
臨時職員	加藤利恵・永戸久美子・前出みさ子・横内江里

8　本書の編集・執筆は新田が担当した。

9　遺物実測図の縮尺は土器・瓦が１／４，その他が１／２である。

10　方位は全て座標北を示す。

12　銅鏡の保存処理及びＸ線写真は西山要一氏（奈良大学文学部教授）の御協力を得た。

目　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　位置と周辺の遺跡 …… 1
　1　遺跡の位置 …… 1
　2　周辺の遺跡 …… 1
　3　過去の調査 …… 2
Ⅲ　遺構と遺物 …… 4
　1　基本層序と遺構埋土 …… 4
　2　奈良時代 …… 9
　3　平安時代 …… 19
　4　鎌倉時代 …… 24
Ⅳ　まとめ …… 34

挿図目次

Fig.1　調査区位置図 (1:2,500) …… 2
Fig.2　周辺の遺跡 (1：50,000) …… 3
Fig.3　調査区北辺土層断面図 (1：50) …… 4
Fig.4　調査区西半 (1：100) …… 5
Fig.5　調査区東半 (1：100) …… 7
Fig.6　古代の遺構配置図 (1)(1：500) …… 9
Fig.7　竪穴建物 1 平面図・断面図 (1：50) …… 9
Fig.8　竪穴建物 1 遺物 (1：4) …… 9
Fig.9　竪穴建物 1 遺物出土状況 (1：20) …… 10
Fig.10 掘立柱建物 1 平面図 (1：50) …… 10
Fig.11 掘立柱建物 1 断面図 (1：50) …… 11
Fig.12 土坑 1 平面図 (1：50) …… 11
Fig.13 土坑 1 断面図 (1：50) …… 12
Fig.14 土坑 1 遺物出土状況 (1：20) …… 12
Fig.15 土坑 1 遺物 (1：4) …… 13
Fig.16 土坑 2 平面図・断面図 (1：50) …… 14
Fig.17 土坑 2 遺物 (1：4) …… 14
Fig.18 土坑 2 遺物出土状況 (1：20) …… 15
Fig.19 土坑 3 平面図・断面図 (1：50) …… 17
Fig.20 土坑 3 遺物出土状況 (1：20) …… 17
Fig.21 土坑 3 遺物 (1：4) …… 18
Fig.22 古代の遺構配置図 (2)(1：500) …… 19
Fig.23 土坑 5 平面図 (1：50) …… 19
Fig.24 土坑 5 断面図 (1：50) …… 19
Fig.25 土坑 5 遺物出土状況 (1：20) …… 20
Fig.26 土坑 5 遺物 (1：4) …… 20
Fig.27 土坑 6 平面図・断面図 (1：50) …… 21
Fig.28 土坑 6 遺物 (1：4) …… 21
Fig.29 土坑 7 平面図 (1：50) …… 21
Fig.30 土坑 7 断面図 (1：50) …… 21
Fig.31 土坑 7 遺物 (1：4) …… 22
Fig.32 土坑 8 平面図 (1：50) …… 22
Fig.33 土坑 8 断面図 (1：50) …… 22
Fig.34 土坑 8 遺物 (1：4) …… 22
Fig.35 土坑 9 平面図 (1：50) …… 22
Fig.36 土坑 9 断面図 (1：50) …… 22
Fig.37 土坑 9 遺物 (1：4) …… 23
Fig.38 土坑 10 平面図 (1：50) …… 23
Fig.39 土坑 10 断面図 (1：50) …… 23
Fig.40 土坑 10 遺物 (1：4) …… 23
Fig.41 柱穴 1・4 ～ 8 遺物 (1：4) …… 24
Fig.42 中世の遺構配置図 (1：500) …… 24
Fig.43 掘立柱建物 2・3 平面図 (1：50) …… 25
Fig.44 掘立柱建物 2・3 断面図 (1：50) …… 26
Fig.45 柱穴 3 遺物 (1：4) …… 26
Fig.46 柱穴 4・9 遺物出土状況 (1：4) …… 26
Fig.47 柱穴 2・9 ～ 11 遺物 (1：4) …… 27
Fig.48 柱穴 3 遺物出土状況 (1：20) …… 27
Fig.49 土坑 11 平面図 (1：50) …… 27
Fig.50 土坑 11 断面図 (1：50) …… 27
Fig.51 土坑 11 遺物出土状況 (1：20) …… 27
Fig.52 土坑 11 遺物 (1：4) …… 28
Fig.53 土坑 12 平面図 (1：50) …… 28
Fig.54 土坑 12 遺物 (1：4) …… 28
Fig.55 溝 1・2 遺物 (1：4) …… 28
Fig.56 溝 2 遺物出土状況 (1：20) …… 29
Fig.57 その他の遺物 (1：4，1：2) …… 29

表目次

Tab.1　土器 …… 30
Tab.2　瓦 …… 33

Tab.3 石製品 …… 33
Tab.4 金属製品 …… 33
Tab.5 土製品 …… 33
Tab.6 報告書抄録 …… 巻末

図版目次

Pl.1 調査区全景 垂直 / 調査区全景 南から
Pl.2 調査区西半 垂直 / 調査区東半 垂直
Pl.3 調査区全景 東から / 竪穴建物 1 南東から / 竪穴建物 1 南から / 竪穴建物 1 遺物出土状況 東から / 掘立柱建物 1 西から
Pl.4 土坑 1 作業風景 西から / 土坑 1 作業風景 南東から / 土坑 1 作業風景 東から / 土坑 1 遺物出土状況 北から / 土坑 1 遺物出土状況 東から / 土坑 1 遺物出土状況 東から / 土坑 4 遺物出土状況 東から
Pl.5 土坑 2 北から / 土坑 2 遺物出土状況 南から / 土坑 3 北から / 土坑 3 遺物出土状況 北から / 土坑 5 北から / 土坑 5 遺物出土状況 北から / 土坑 6 北から / 土坑 7 西から
Pl.6 土坑 8 東から / 土坑 9 南から / 土坑 10 北から / 掘立柱建物 3 北西から / 柱穴 9 遺物出土状況 北から / 柱穴 4 遺物出土状況 北から / 柱穴 3 遺物出土状況 北から
Pl.7 土坑 11 遺物出土状況 北から / 土坑 11 北から / 溝 2 遺物出土状況 北から / 溝 2 遺物出土状況 北から / 溝 2 作業風景 北東から / 溝 2 北東から
Pl.8 遺物（1 ～ 10・20）
Pl.9 遺物（11 ～ 19・21 ～ 23）
Pl.10 遺物（24 ～ 31）
Pl.11 遺物（32 ～ 45）
Pl.12 遺物（46 ～ 58・60 ～ 62）
Pl.13 遺物（59・63 ～ 65・67 ～ 70・72・74）
Pl.14 遺物（66・71・73・75 ～ 79・85 ～ 88）
Pl.15 遺物（80 ～ 84・89 ～ 93）

Ⅰ 調査に至る経緯

平成５年８月，鈴鹿農業協同組合から鈴鹿市教育委員会に対して農業用施設建設に係る試掘調査の依頼があった。鈴鹿市教育委員会では同年 11 月 24 日から 26 日まで事業予定地域約 16,000㎡を対象に範囲確認のための試掘調査を実施し，調査結果を同年 12 月９日付けで鈴鹿農業協同組合に通知した。平成６年６月 15 日，試掘結果に基づき鈴鹿農業協同組合代表理事組合長杉野喜市と鈴鹿市教育委員会教育長市川年夫との間で埋蔵文化財保護協定書を締結する一方，同年５月 18 日付けで依頼のあった土壌診断施設及び資材倉庫部分約 810㎡を対象にした本調査について鈴鹿農業協同組合代表理事組合長杉野喜市と鈴鹿市遺跡調査会代表市川年夫との間で発掘調査の委託契約を同年６月 15 日に締結した。

現地調査は平成６年７月４日から同年８月 19 日まで実施し，現地説明会は８月４日に実施した。調査面積は最終的には現存水路や調査区北辺部分を除いた 570㎡となった。

Ⅱ 位置と周辺の遺跡

1　遺跡の位置

調査地点は，地番が鈴鹿市津賀町字池ノ坪 807 番 1・3・4，809 番 -2・4・5 で周知の埋蔵文化財包蔵地である。遺跡の推定範囲は台地縁辺部から津賀町集落までの約 16 万㎡に及ぶ。地形的には水沢扇状地の扇端付近に位置する。標高は約 45 ｍで，遺跡南東に位置する鈴鹿川との比高差は約 20 ｍである。地表にはクロボク土が発達する。戦前にすでに耕地整理が行われ，さらに今回の開発に伴って 0.6 ｍ前後の盛土造成がなされた。

2　周辺の遺跡

当遺跡を乗せる鈴鹿川流域の台地は北勢地方屈指の遺跡密集地として知られる。旧石器時代の遺跡は，鈴鹿市高岡町付近でやや濃い分布を示すほかは各所に散在している。縄文時代では押型文期の大鼻遺跡や晩期の忍山遺跡など調査が実施され実態の明らかなものが増える。弥生時代から古墳時代までの遺跡は前代と比べ一段と遺跡数が増すばかりでなく，それに伴って調査件数も多い。

鈴鹿川・安楽川の合流地点を中心とした段丘上は，鈴鹿川流域の中でも特に多くの古墳が分布する。亀山市田村町に所在する能褒野王塚古墳は同流域最大の規模を誇る前方後円墳で，かつ同流域の初源的な古墳の一つとして知られている。亀山市川合町の上椎ノ木１号墳は４世紀に遡る古墳の貴重な調査例で，四神鏡や石製小型壺・玉類などが割竹型木棺と推定される主体部から検出された。鈴鹿市加佐登町・石薬師町に所在する白鳥塚古墳は県下最大の円墳として知られてきたが，範囲確認調査によって全長 78 ｍの帆立貝式前方後円墳であることがわかった。出土した埴輪から５世紀前半に遡るものと推定され，能褒野王塚に後続する首長墓と云える。５世紀中頃以降の古墳としては西ノ野５号墳・１号墳（王塚古墳）・井尻古墳などが知られる。井田川茶臼山古墳や保子里１号墳は豪華な副葬品の出土で知られる後期古墳で，前者からは画文帯神獣鏡や銀象嵌刀装具などが，後者からは金製垂飾付耳飾や青銅製承盤付鋺などが出土している。

奈良時代以降では，津賀平遺跡から西南西へ約 2㎞に位置する長者屋敷遺跡や北東 1㎞に位置する川原井瓦窯跡群，さらに東北東 4.5㎞には伊勢国分寺跡などが特筆される。

鈴鹿市広瀬町に所在する長者屋敷遺跡は，瓦葺礎石建物で構成される近江国庁に類似した政庁の確認により伊勢国府跡として国の史跡に指定されている。政庁の北方には１辺約 120 ｍを基準とした方格地割が確認され，地割の一部からは瓦葺礎石建物群が確認されている。これら政庁北方の建物群は北方官衙と仮称され，国府関連の施設と推定されている。長者屋敷遺跡は８世紀中頃の国府跡と考えられるが，８世紀末ないし９世紀初頭には廃絶していることが確認されている。長者屋敷遺跡から鈴鹿川・安楽川を挟んで南対岸に位置する国府町は，その地名から国府推定地と目されてきた。長者屋敷遺跡の政庁が短期間で未完成のまま廃絶していることや実務的な官衙が長年の調査にもかかわらず未見であることから地名の残る国府町における国府関連遺構の発見が期待されている。

伊勢国分寺跡は大正 11 年に国の史跡に指定され，昭和 63 年以降，指定地及びその周辺において調査が進められてきた。指定地は僧寺と考えられ，１辺約 180 ｍ四方の築地塀に囲まれた伽藍地が明らかになっている。金堂・講堂・中門・南門が伽藍地の西寄りに南北に配さ

Fig.1　調査区配置図（1：2,500）

れている。塔は未確認であるものの，伽藍地東半に所在する可能性が考えられ，塔院の可能性がある院の一部が確認されている。尼寺は指定地の東約 300 mの住宅密集地に想定され，僧寺とは異なる文様の軒瓦が出土している。川原井瓦窯跡は尼寺所用瓦の生産地として知られている。

鈴鹿川の右岸では幅 9m の直線的な古代道路跡が見つかった平田遺跡が注目される。平田遺跡の位置は河曲郡家跡と推定される狐塚遺跡や国分寺跡が所在する国分町と国府推定地である国府町を直線的に結んだ中間地点に相当し，検出された道路跡の性格が注目される。敷設時期には不明な点が多いが，ある時期の東海道である可能性が高い。

津賀平遺跡は，こうした古代の寺院・官衙関連遺跡が濃密に分布する鈴鹿川沿いに位置している。古代あるいはそれ以前から交通の要衝であった鈴鹿川流域はＪＲ関西本線や国道 1 号線が通るなど現在に至るまで主要交通路として機能し，それに伴って各種開発が幾度となく繰り返されてきた歴史的背景を有している。

3　過去の調査

当地点から市道庄野津賀線を挟んで約 100 m北には第 1 次調査地点が位置する。第 1 次調査は同じく農業用施設建設に伴い 1989 年 9 月 11 日から 30 日まで，700㎡について実施された。その結果，古墳時代前期の竪穴建物が 7 棟検出され，鎌倉時代の土坑・柱穴などが検出されている。

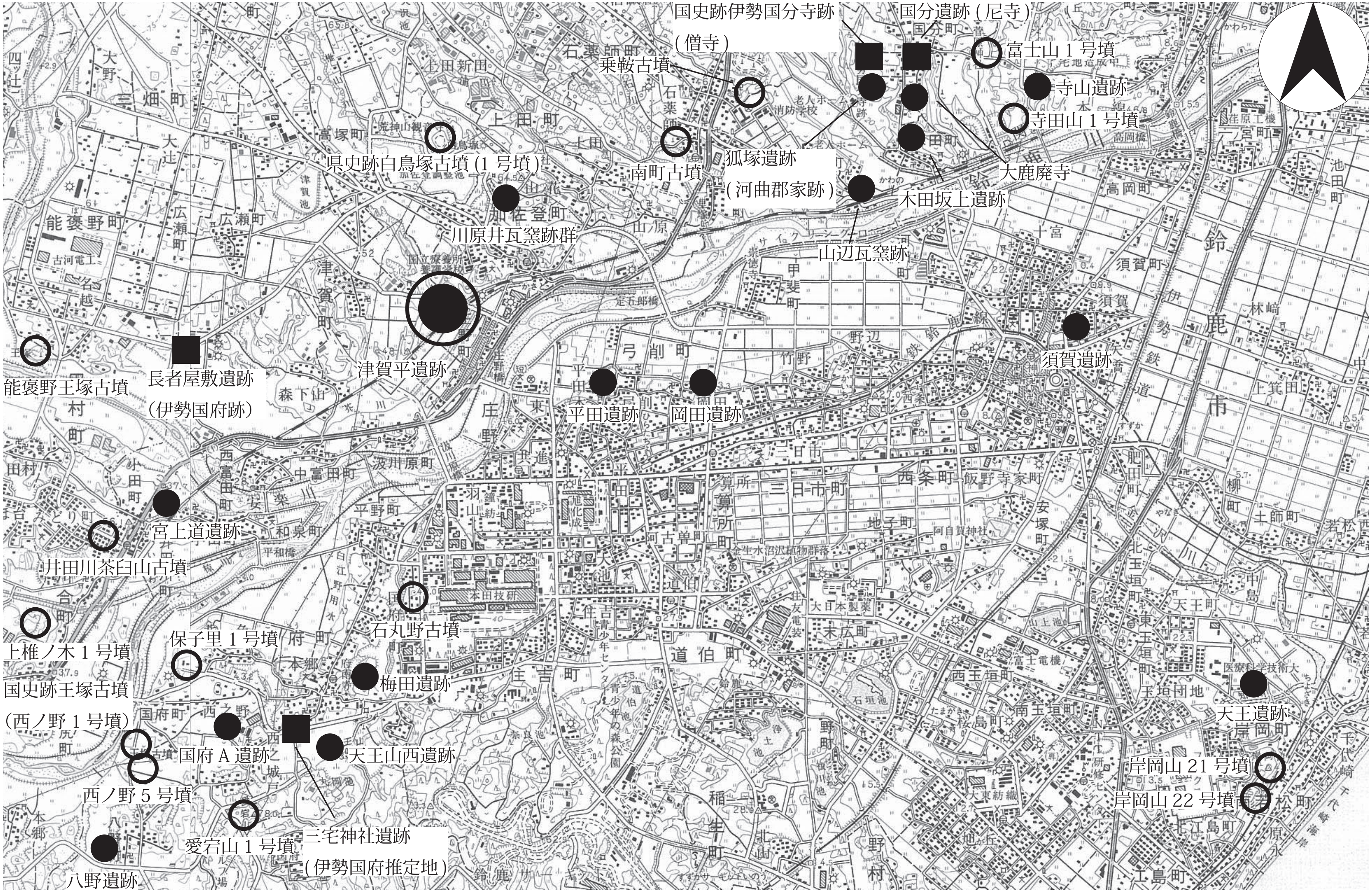


Fig.2　周辺の遺跡（1：50,000）

Ⅲ　遺構と遺物

1　基本層序と遺構埋土（Fig.3）

当遺跡ではクロボク層が発達するが，耕地整理など過去の各種開発によって複雑な層序が見られる。プライマリーなクロボク層は全く見られず，地山層上面まで見られるクロボク層は中世以降の包含層となっている。遺構検出は地山層上面で実施した。

遺構埋土はクロボク土が主体となり，時期ごとの区別は難しいが，中世の遺構埋土は概ね乾燥が早く，灰色味を帯びる。

今回の調査地点の基本層序は以下の通りである。

Ⅰ：開発に伴う造成土

Ⅱ：クロボク質の客土。戦前（近・現代）の耕地整理に伴う造成層

Ⅱａ：10YR1.7/1 黒色シルト

Ⅱｂ：10YR2/2 黒褐色シルト

Ⅲ：10YR1.7/1 黒色シルト。クロボク質の近世・近代耕作土。細礫を少量含む

Ⅳ：クロボク質の中世遺物包含層。細礫を少量含む

Ⅳａ：10YR2/2 黒褐色シルト。酸化鉄を少し含む

Ⅳｂ：10YR2/1 黒色シルト。酸化鉄・マンガンを含む

Ⅳｃ：10YR2/1 黒色シルト。酸化鉄を多く含む。マンガン含む

Ⅴ：10YR7/6 明褐色砂質シルト。地山

1：10YR2/1 黒色シルト。礫含む攪乱層。しまりがない

2：10YR1.7/1 黒色シルト。礫含む攪乱層。しまりがない

3：10YR2/1 黒色シルト。遺構埋土

4：10YR2/1 黒色シルト。遺構埋土。小礫含む

5：10YR1.7/1 黒色シルト。遺構埋土。小礫含む

6：10YR1.7/1 黒色シルト。遺構埋土

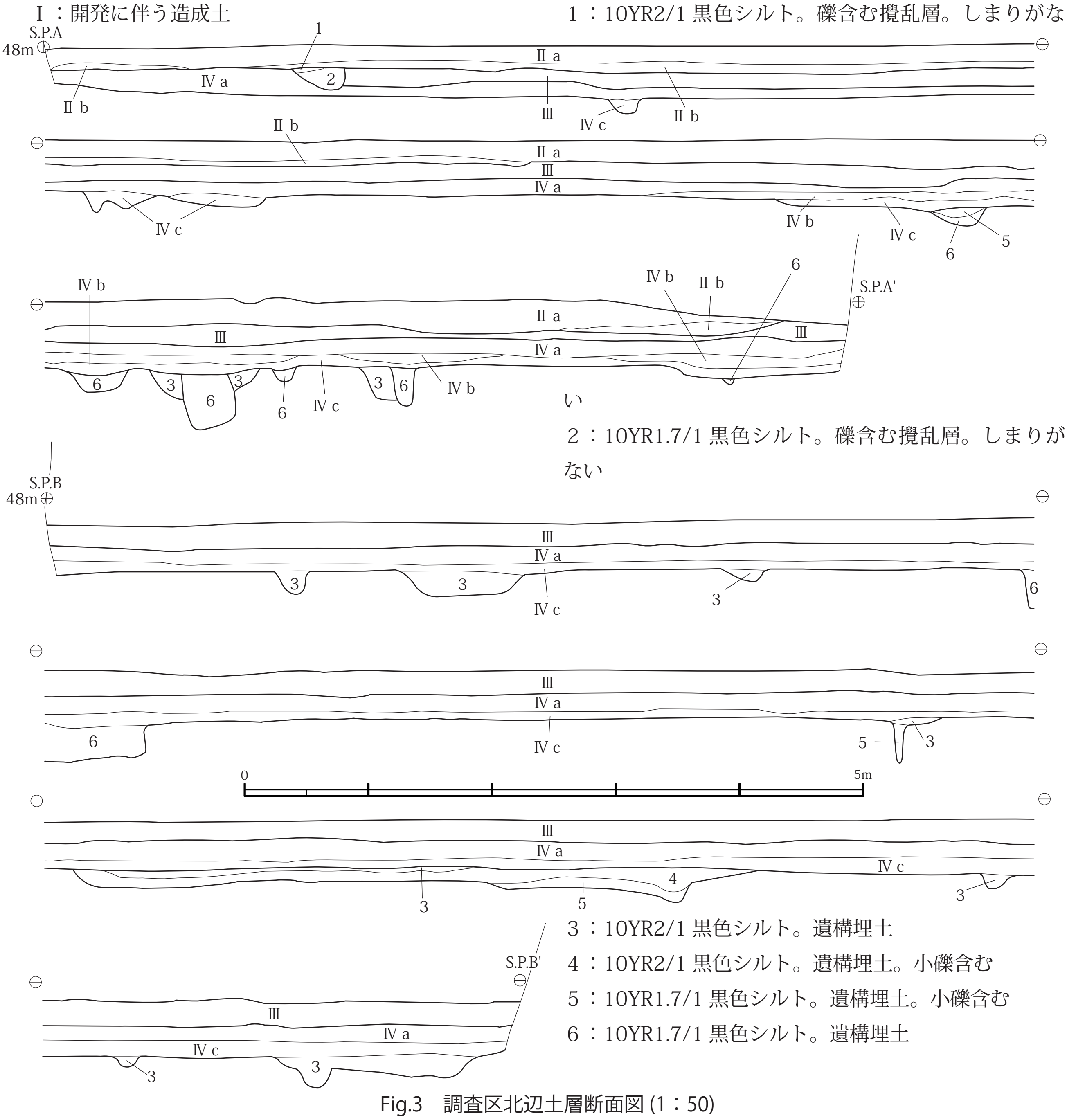


Fig.3　調査区北辺土層断面図 (1：50)

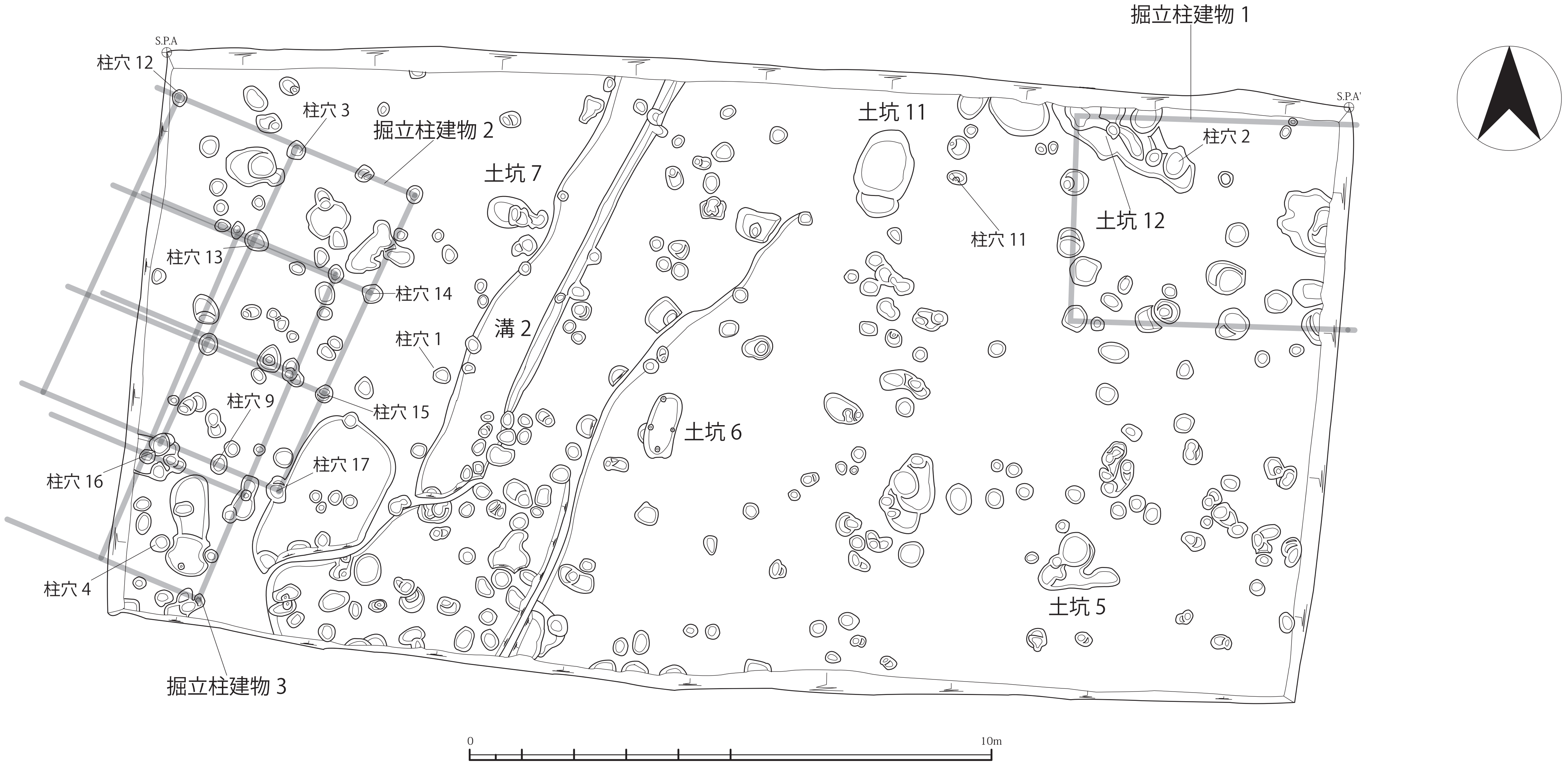


Fig.4　調査区西半 (1：100)

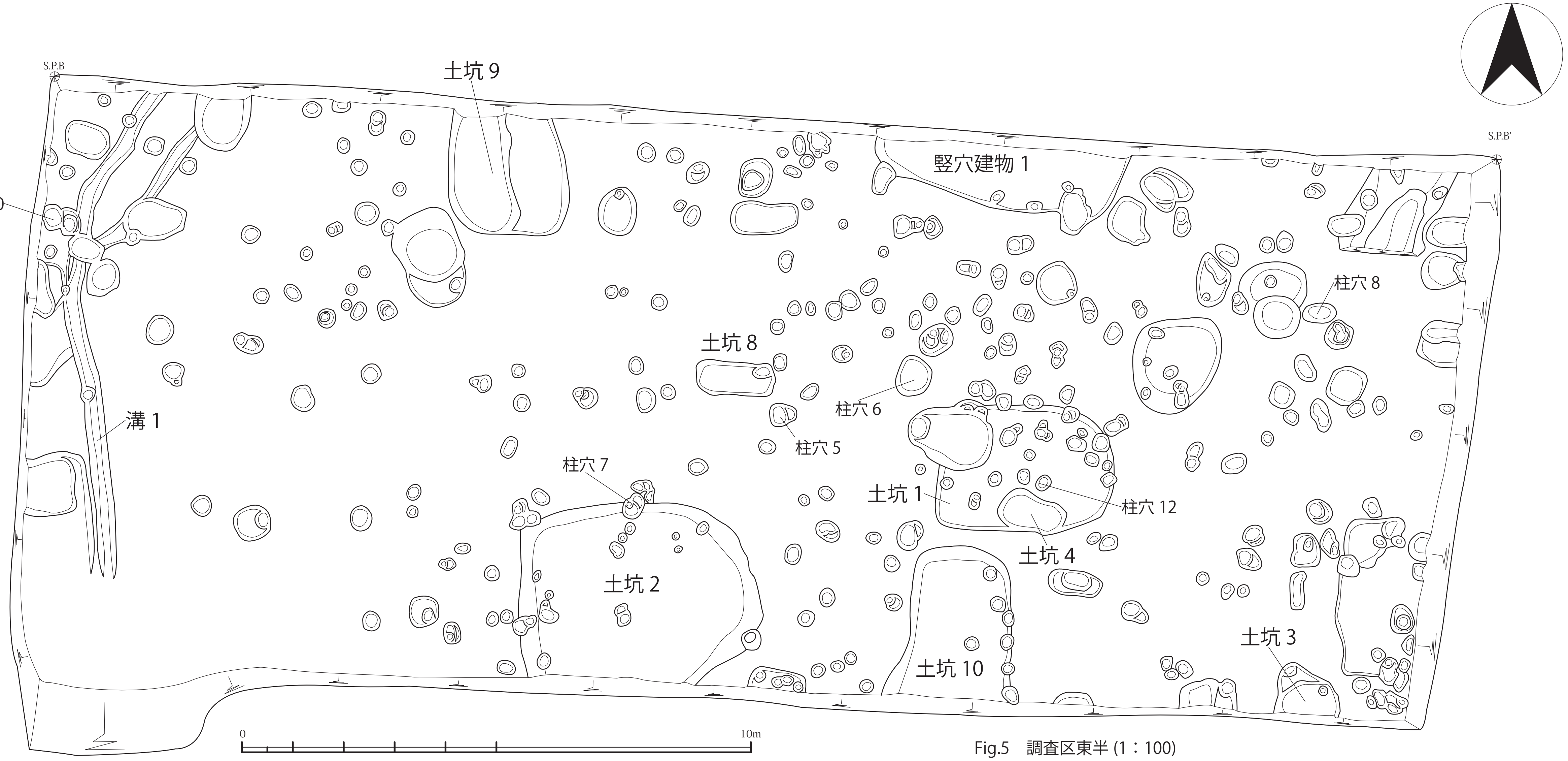


Fig.5　調査区東半 (1：100)

2　古代 (1)(Fig.6)

調査区の東寄りに集中して検出された。竪穴建物 1・掘立柱建物 1・土坑 1 ～ 4 などがある。

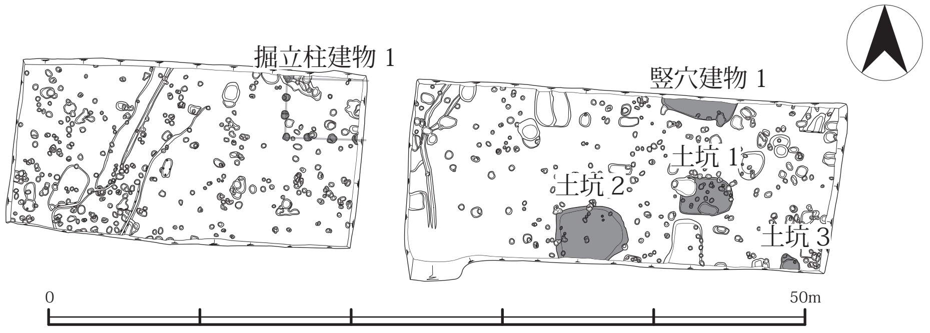


Fig.6　奈良時代の遺構配置図 (1：500)

竪穴建物 1(Fig.7)

調査区北東付近で南辺部のみ検出され，それ以外は調査区外となった。東西 4.9 m，深さ 15㎝で，遺構主軸はW 16゜Nである。土師器皿 (1) や土師器坏・甕が出土した。8 世紀後葉以降の埋没が考えられる。

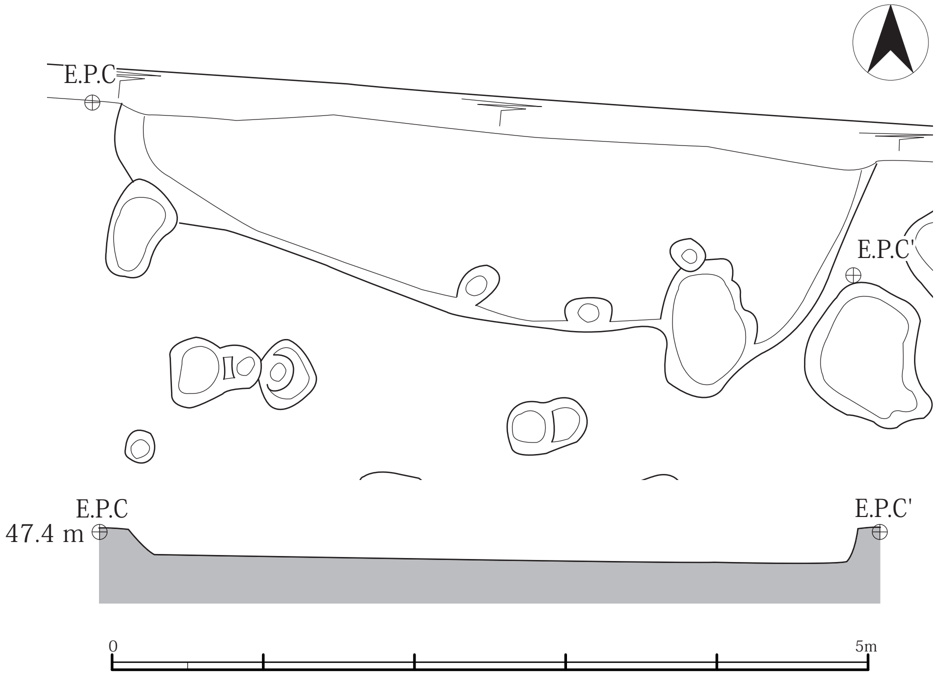


Fig.7　竪穴建物 1 平面図・断面図 (1：50)

土師器皿 (1)　竪穴建物 1 南東隅から出土した大型の皿である。体部は斜め外方へ立ち上がり，口端部内面は沈線状の段をなす。体部外面はケズリ調整がなされる。

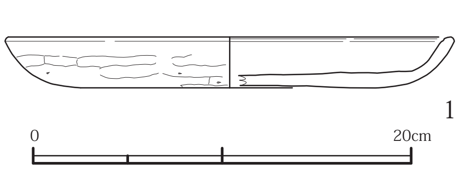


Fig.8　竪穴建物 1 遺物 (1：4)

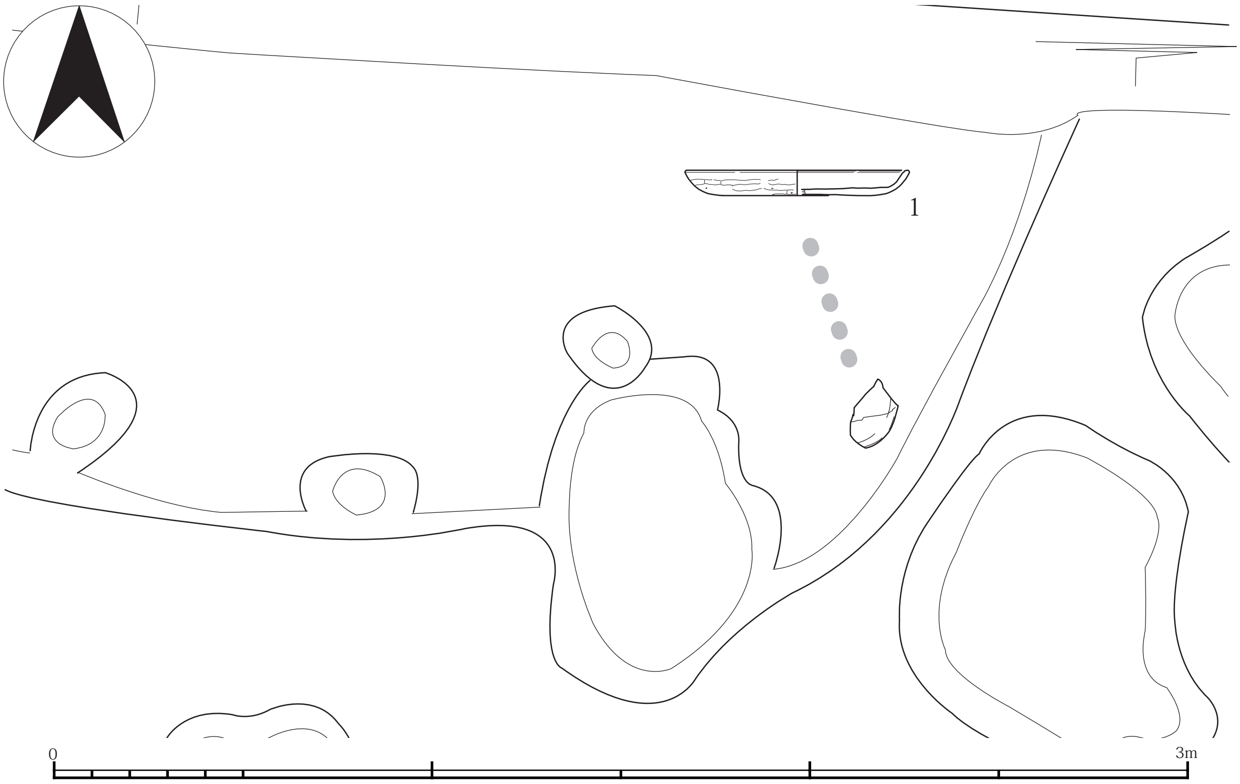


Fig.9　竪穴建物１遺物出土状況 (1：20)

掘立柱建物 1(Fig.10・11)

調査区中程で検出された３間×３間以上の建物で，南北 3.9 m・東西 4.8 m以上，方位はＮ２°Ｅである。中世の遺構に切られる。出土遺物による時期の特定はできないが，建物方位から８世紀後葉を中心とする時期のものと考えて矛盾はない。

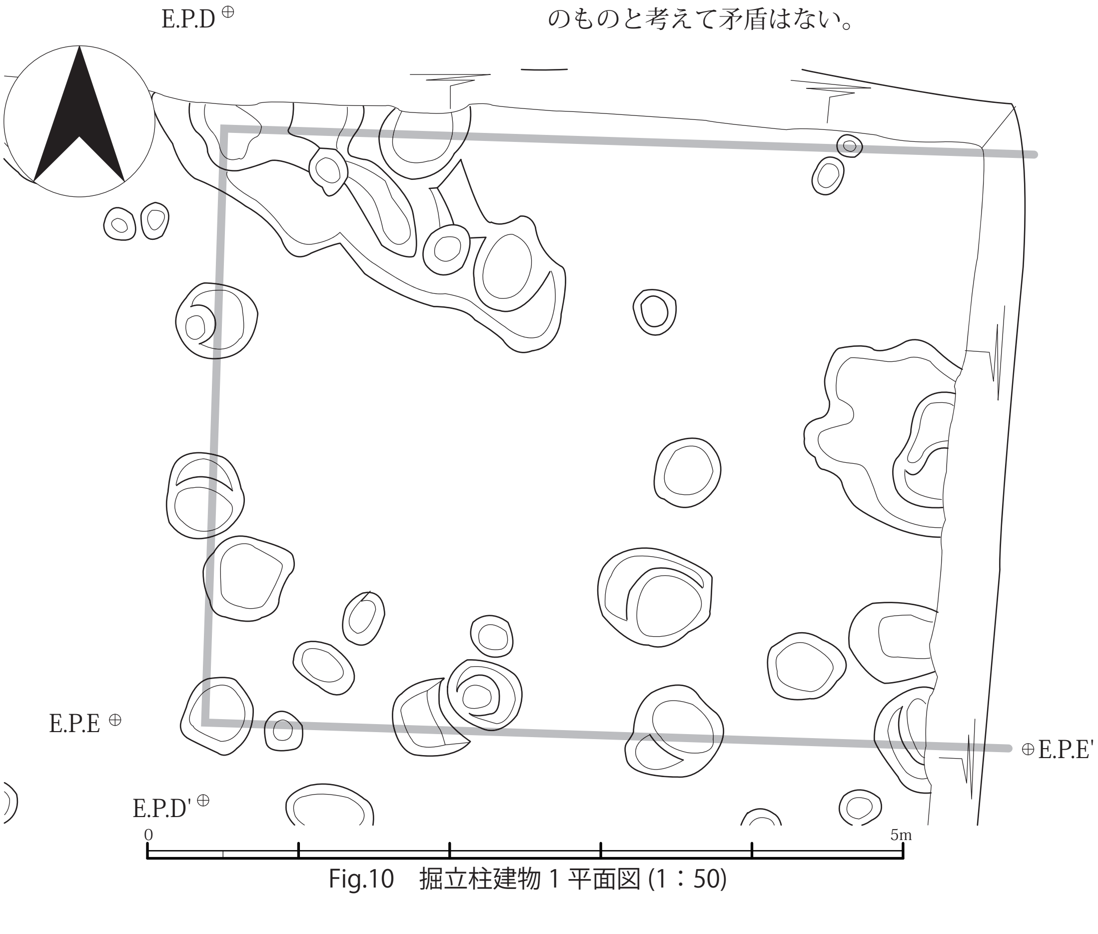


Fig.10　掘立柱建物１平面図 (1：50)

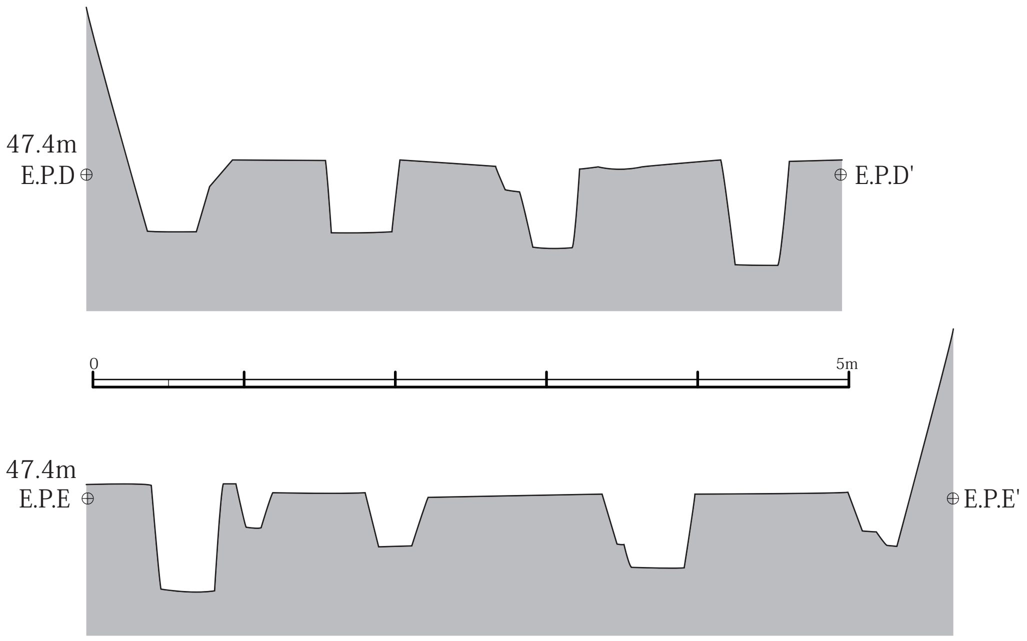


Fig.11　掘立柱建物 1 断面図 (1：50)

土坑 1(Fig.12・13)

竪穴建物 1 の南約 4 mに位置する。長径 3.5 m・短径 2.6 m・深さ 80㎝。皿状でやや大きめの土坑である。北西隅は平安時代の遺構に切られる。中央に焼土が認められる。とりあえず土坑としておくが，平坦な床面を有する竪穴建物状の施設であった可能性が考えられる。土坑 4 はこの竪穴状土坑の南辺部に付随する貯蔵穴状の土坑である。土師器坏 (3)・甕 (4・5)，須恵器高盤 (6・7)・平瓶 (8) のほか，土師器皿が出土し，土坑 4 からは土師器坏 (2)・皿 (20)・平瓦 (9) が出土した。8 世紀後葉以降の埋没が考えられる。

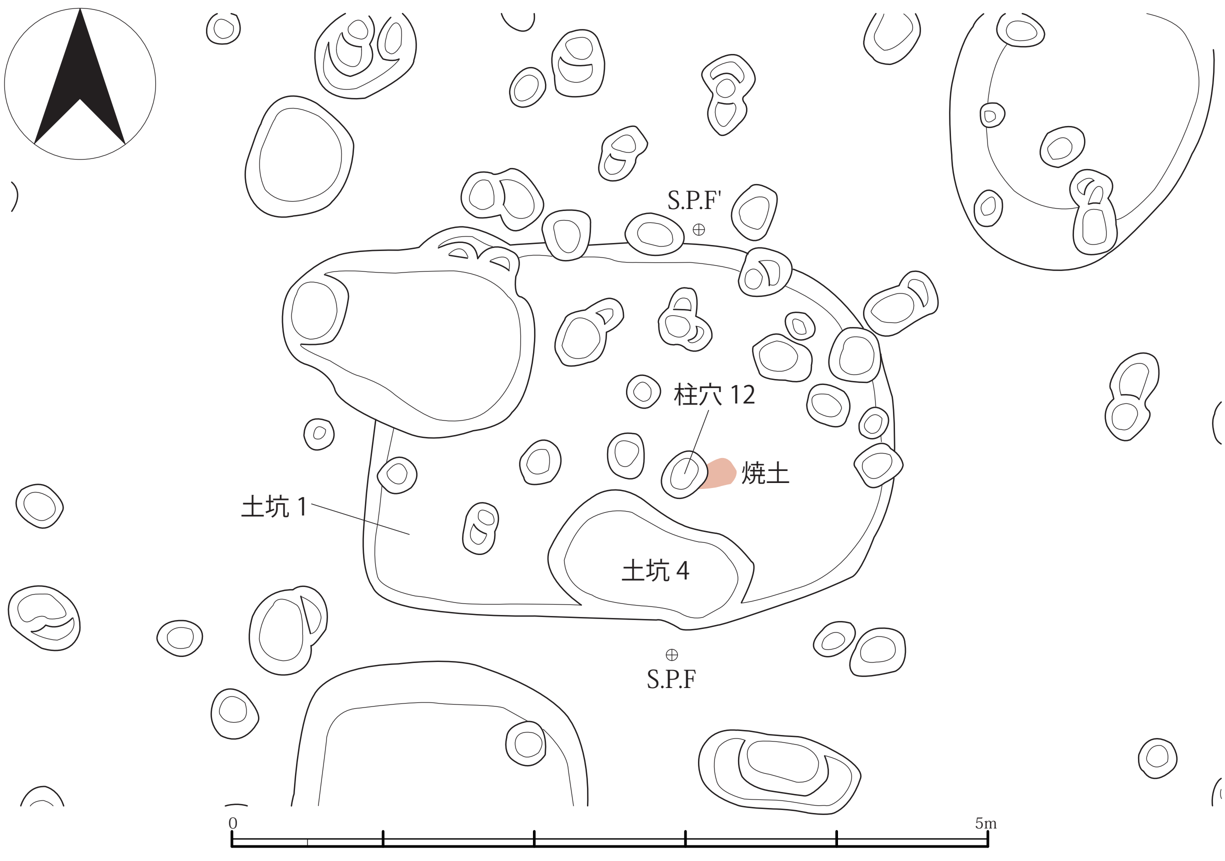
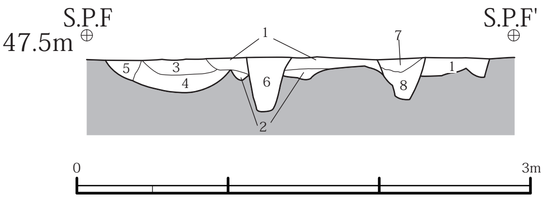


Fig.12　土坑 1 平面図 (1：50)



1　10YR2/1 黒色シルト。黄褐色シルト・焼土の粒子含む

2　10YR4/4 褐色シルト。やや粘性高い

3　10YR1.7/1 黒色シルト。焼土・炭化物少し含む

4　10YR1.7/1 黒色シルト。黄褐色シルト・焼土・炭化物含む

5　10YR3/4 暗褐色シルト

6　10YR1.7/1 黒色シルト。黄褐色シルト・焼土の粒子・ブロック含む

7　10YR1.7/1 黒色シルト

8　10YR1.7/1 黒色シルト

Fig.13　土坑 1 断面図 (1：50)

土師器坏 (2・3)　2 は土坑 4 の底面付近から出土した胎土の粗い小型の坏である。体部は丸みを帯びるが，口縁部は滑らかに外反する。体部から口縁部にかけての外面はヨコナデされる。内面には炭化物が付着する。

3 は土坑 1 中央から出土した胎土の粗い中型の坏である。口縁端部はやや外反する。体部から口縁部にかけてヨコナデされる。

土師器皿 (20)　小型の皿である。口縁部は内湾し，端部は肥厚せず，丸みを帯びた矩形をなす。底部外面はナデられ，口縁部はヨコナデされる。

土師器甕 (4・5)　4 は口縁部を欠く小型の甕である。平底の底部を持つ。体部外面は縦方向にハケメ調整がなされた後，縦もしくは斜方向に削られ，内面は横方向にハケメ調整される。口縁部はヨコナデされる。

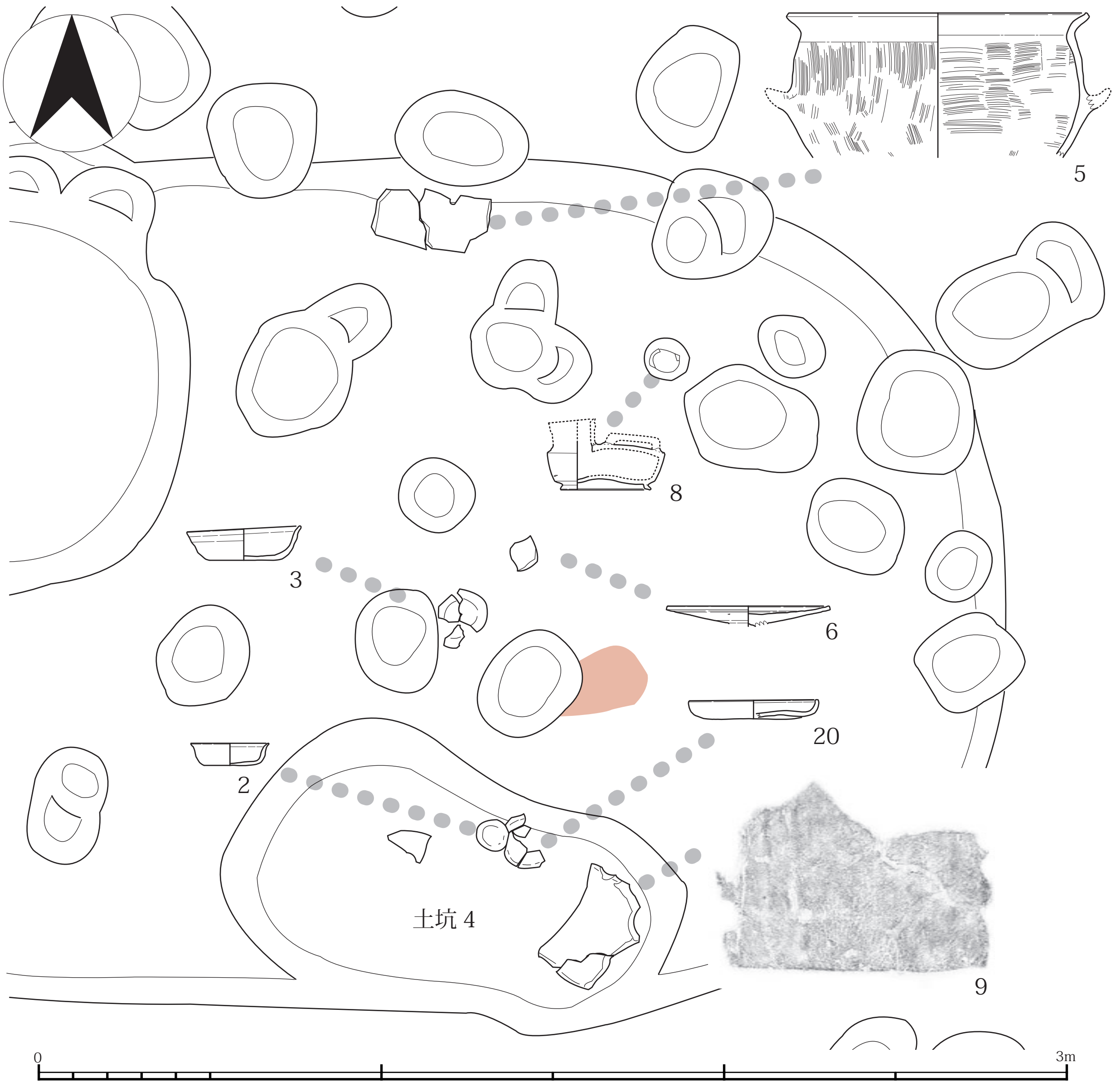


Fig.14　土坑 1 遺物出土状況 (1：20)

5 は土坑 1 北辺から出土した把手付きの甕である。体部外面は縦に，内面は横にハケメ調整がなされ，口縁部はヨコナデされる。

須恵器高盤 (6・7)　6・7 は同一個体と考えられ，脚部上半を欠損する。脚部端部は下方に摘み出される。盤部外面は広範囲にケズられる。

須恵器平瓶 (8)　土坑 1 北辺から出土した高台付きの平瓶である。高台は丸みを帯び，外方へ開く。体部外面はヘラケズリがなされる。

平瓦 (9)　土坑 4 直上から出土した平瓦の狭端部片である。一枚造りによるものと考えられる。凸面には縄目叩き痕が残る。凹面は風化が著しく成形・調整痕を留めない。側辺は 3 ～ 4 面にわたって面取り状に調整される。

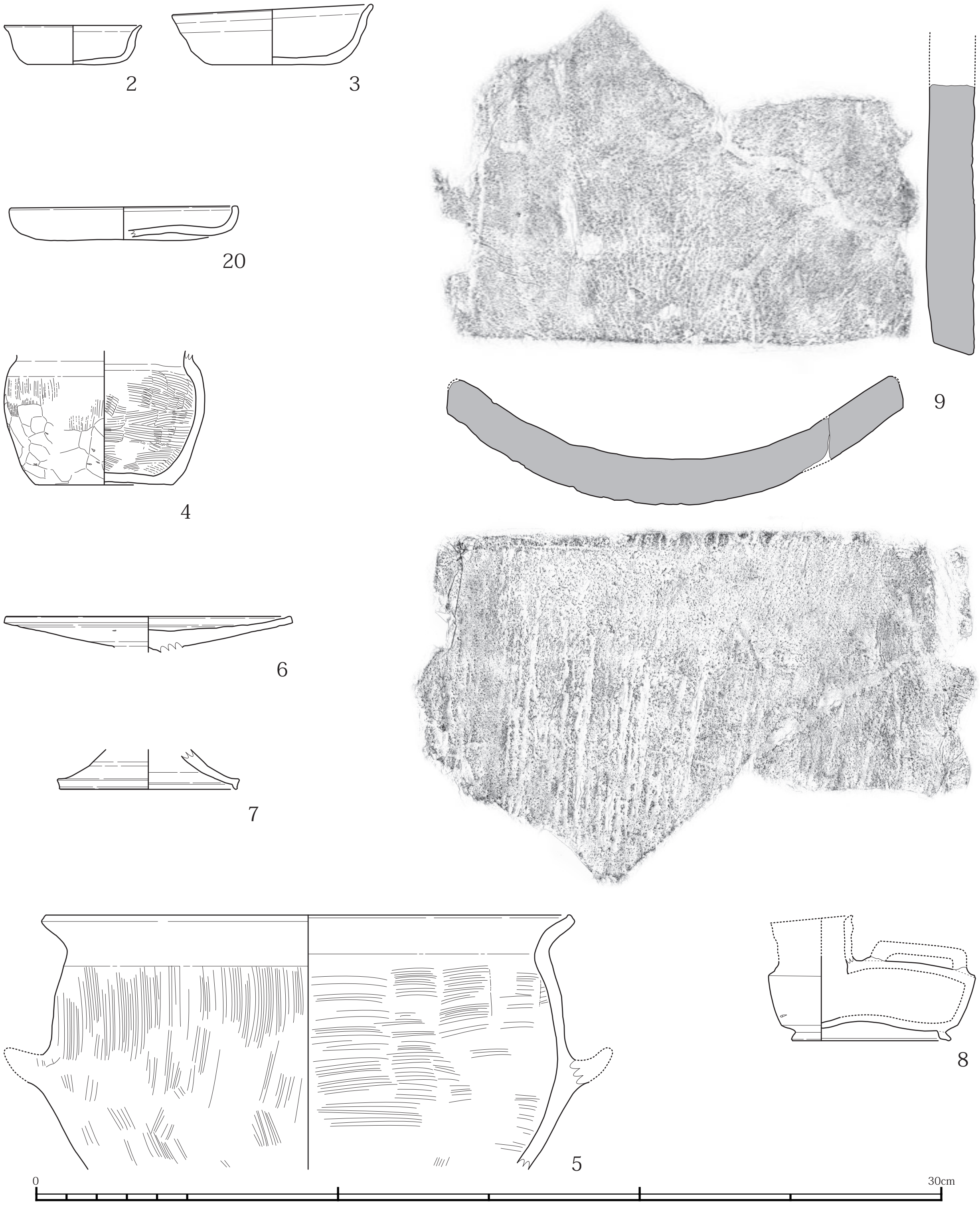
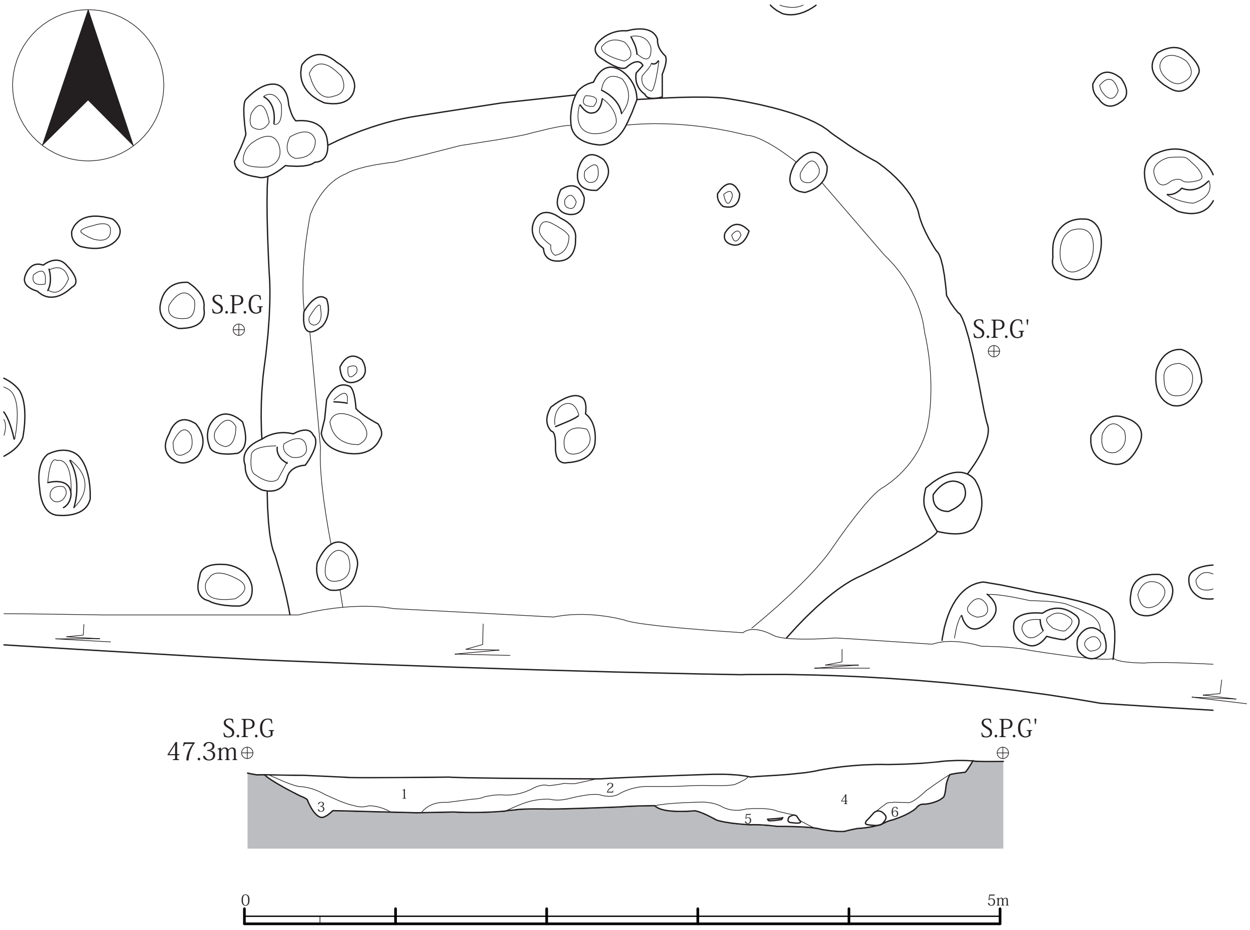


Fig.15　土坑 1 遺物 (1：4)

土坑 2(Fig.16)

土坑 2 の西南西約 4 mに位置する不整形の大型土坑。長径 4.9 m・深さ 48㎝で，南辺は調査区外である。埋土には炭化物・焼土片を少量含む。土師器坏 (10)・甕 (11)・平瓦 (12) の他，土師器・須恵器片が出土した。8 世紀後葉以降の埋没が考えられる。



1　10YR2/1 黒色シルト。10YR6/6 明黄褐色シルトの粒子をわずかに含む

2　10YR3/2 黒褐色シルト

3　10YR2/1 黒色シルト。10YR6/6 明黄褐色シルトの粒子を含む

4　10YR2/1 黒色シルト。10YR6/6 明黄褐色シルトの粒子や焼土・炭の粒子を含む

5　10YR3/1 黒褐色シルト。炭を少し含む

6　10YR2/1 黒色シルト。10YR6/6 明黄褐色シルトの粒子を含む

Fig.16　土坑 2 平面図・断面図 (1：50)

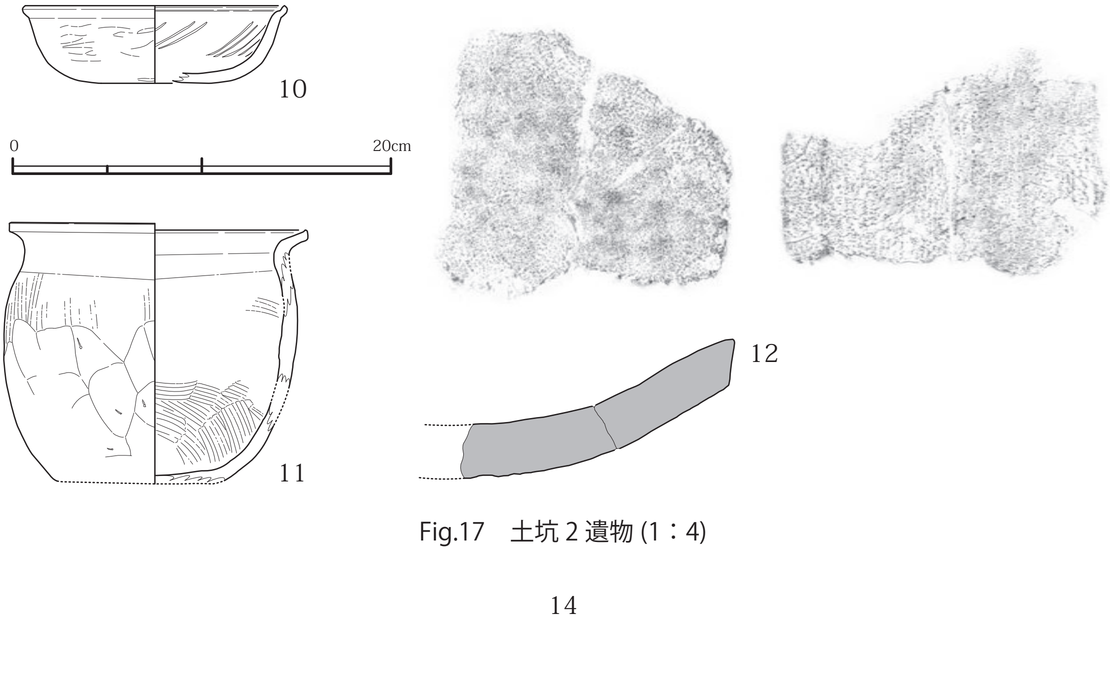


Fig.17　土坑 2 遺物 (1：4)

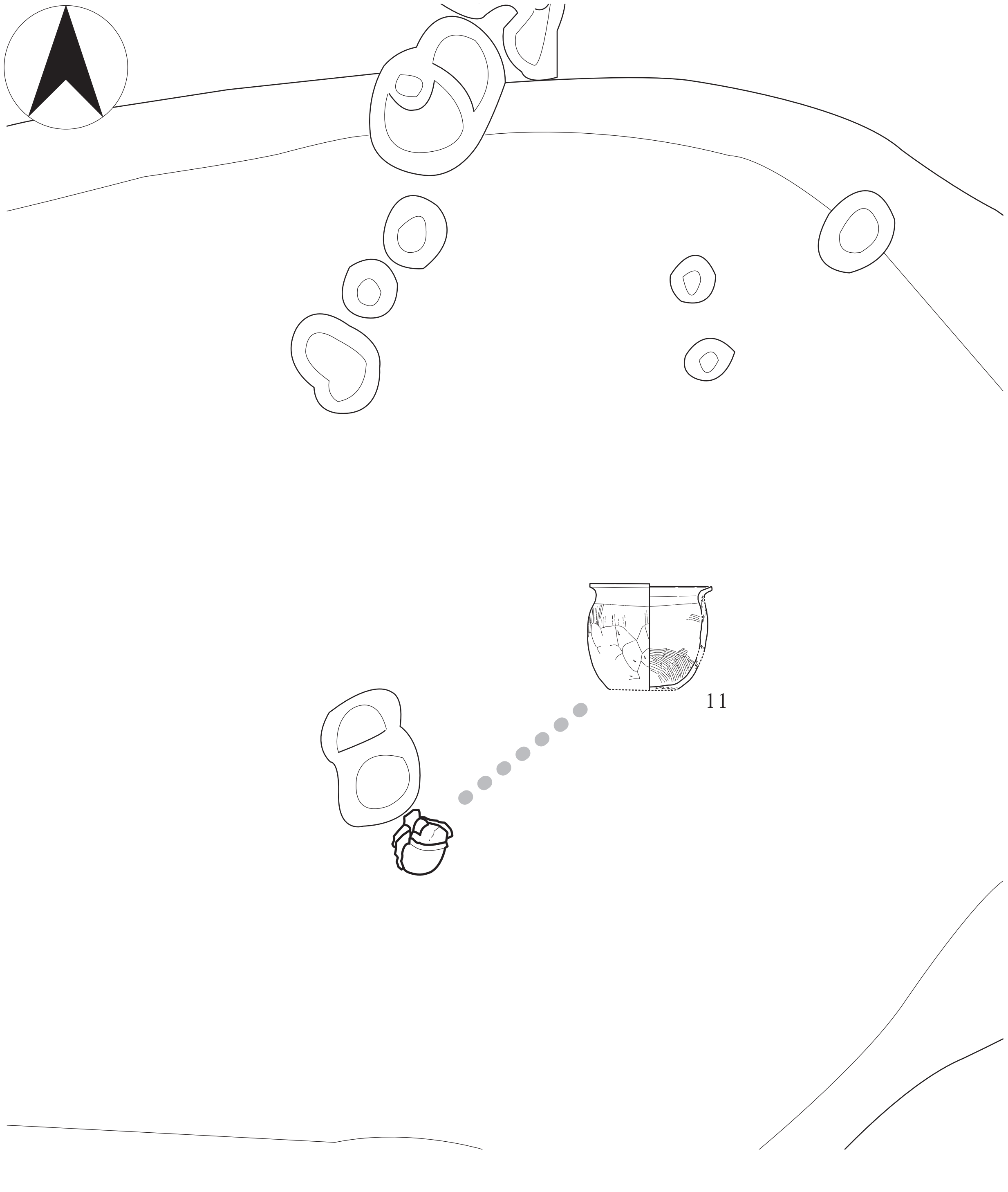


Fig.18　土坑２遺物出土状況 (1：20)

土師器坏 (10)　中型の坏である。体部は丸みを帯び，口縁端部は短く外反し，上方へ摘み上げられる。したがって，口縁部内面は沈線状に窪む。体部外面は横方向にヘラミガキされる。内面には放射状暗文がみられる。

土師器甕 (11)　土坑２中央から出土した。平底小型の甕である。体部外面は縦にハケメ調整がなされた後，縦ないしは斜めにヘラケズリされ，内面は横・斜位にハケメ調整される。口縁部はヨコナデされる。

平瓦 (12)　側辺付近の破片。側辺は２面ケズられる。凸面には縄目叩き痕が凹面には糸切り痕が残存する。

土坑 3(Fig.19)

土坑 1 の南東約 4.7 mに位置する。径 1.3 m・深さ 46㎝の小型の土坑で，南辺は調査区外となる。土師器坏 (13 ～ 17)・土師器皿 (18 ～ 19・21 ～ 23)・土師器甕 (24 ～ 29)・須恵器壺 (30)・製塩土器 (31 ～ 32) など図化可能な完形資料を含む豊富な遺物が集中出土した。その他，土師器片・製塩土器片が出土している。8 世紀後葉以降の埋没が考えられる。

土師器坏 (13 ～ 17)　胎土の精良なもの (13 ～ 16) と粗いもの (17) がある。前者は中型のもの (13 ～ 14) と大型のもの (15 ～ 16) に細分される。

13 は中型の坏で，丸みを帯びた体部と平らな底部を有する。口縁端部はあまり肥厚せず，内面にはっきりした稜を有する。体部外面は横位にヘラミガキされ，底部はユビオサエ・ナデが施される。内面には，螺旋状暗文とやや乱れのある放射状暗文がある。

14 は中型の坏で，丸い体部・底部を有する。口縁端部は丸く収まる。外面には横方向にミガキがなされ，口縁部はヨコナデされる。内面には太く深い螺旋状暗文が施される。

15 は大型の坏である。平たい底部とやや直線的な体部を有し，口縁はわずかに内湾し，端部はわずかに肥厚する。体部外面は横にヘラミガキされ，口縁部はヨコナデされる。内面には粗い螺旋状暗文がある。

16 は大型の坏である。やや平たい底部から体部は滑らかに丸みを帯び，口縁端部はわずかに肥厚し，端部内面には稜がある。体部外面はヘラケズリののちミガかれ，口縁部は横ナデされる。内面には放射状暗文とやや乱れた螺旋状暗文がある。

17 は粗製の坏である。わずかに平底の底部を有し，体部は丸みを帯び，口縁部は外反する。底部外面はユビオサエ・ナデが施され，口縁部はヨコナデされる。

土師器皿 (18 ～ 19・21 ～ 23)　小型のもの (18 ～ 19) と中型 (21 ～ 23) のものがある。

18 はやや成形の粗雑な小型の皿である。口縁部は内湾し，端部は丸くすぼまる。体部外面はヘラケズリ・ミガキがなされ，口縁部はヨコナデされる。内面には乱れた螺旋状暗文が施される。

19 は小型の皿である。口縁部は内湾し，端部はやや肥厚する。体部外面は横方向にケズられ，口縁はヨコナデされる。

21 は中型の皿である。口縁部は滑らかに立ち上がり，端部はわずかに肥厚し，内面に稜をもつ。体部外面は横方向にヘラミガキ・ケズリが見られる。

22 は中型の皿である。口縁端部はわずかに肥厚する。

23 は中型の皿である。口縁部は丸みを帯びて滑らかに立ち上がり，端部はわずかに内湾しながら，肥厚する。

土師器甕 (24 ～ 29)　小型の甕 (24・25)・中型の甕 (26)・把手付き甕 (27)・大型の甕 (28・29) がある。

24 は小型の甕である。体部は平底の底部から球形に立ち上がり，口縁部は緩やかに外反し，端部は上方へ摘み上げられる。体部外面は縦にハケメ調整されたあと，縦・斜方向に削られ，内面は横・斜方向にハケメ調整される。口縁部はヨコナデされる。

25 は小型の甕の口縁・体部片である。口縁部は厚く，端部は短く上方に摘み上げられる。体部外面は縦に，内面は横にハケメ調整される。

26 は中型の甕。口縁部は明瞭に屈曲し，端部は矩形をなす。体部外面は縦にハケメ調整され，口縁部はヨコナデされる。

27 は把手付きの甕である。体部はあまり膨らまず，口縁部は緩やかに外反する。口縁端部はわずかに上方へ摘み上げられる。体部外面は縦に，内面は横にハケメ調整され，口縁部はヨコナデされる。

28 は大型の甕である。口頸部は短く垂直に立ち上がり，口縁部は外反する。口端部は上方に摘み上げられるが，その断面は丸い。体部外面は縦に，内面は横にハケメ調整されるが，それぞれ工具を異にする。口縁部はヨコナデされる。

29 は大型の甕である。口頸部はやや肥厚し，口端部はごく短く摘み上げられる。体部外面は縦に，内面は横にハケメ調整され，口縁部は横ナデされる。

須恵器壺 (30)　小型の壺の底部と考えられる。高台は低い角高台で，内側が接地する。底部は厚く，体部外面はヘラケズリされる。

製塩土器 (31 ～ 32)　31 ～ 32 は図示可能な個体で，その他数個体の破片が出土している。

31 は口縁部から体部にかけての破片と底部片からなるが，器高は計測できない。体部はやや斜め外方に立ち上がるものと考えられ，口縁部はわずかに内湾する。体部外面はユビオサエ痕が残り，内面は横方向の調整が施される。底部外面には籾圧痕が残り，輪積痕は内傾する。

32 は口縁部片である。体部はほぼ直立し，口端部は内湾する。内面は横方向にハケメ調整される。

平瓦 (33)　平瓦の破片である。凸面には指圧痕と縄目痕が残り，側縁には 3 面の面取り調整が見られる。凹面は横位に調整される。

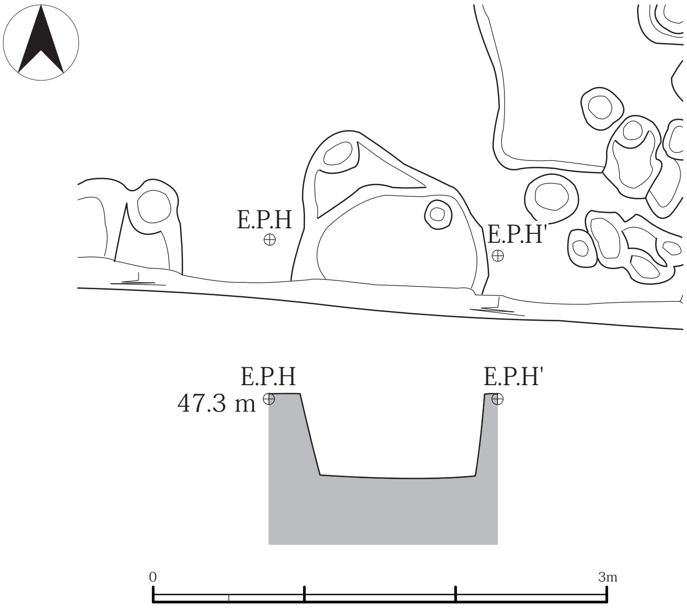


Fig.19　土坑 3 平面図・断面図 (1：50)

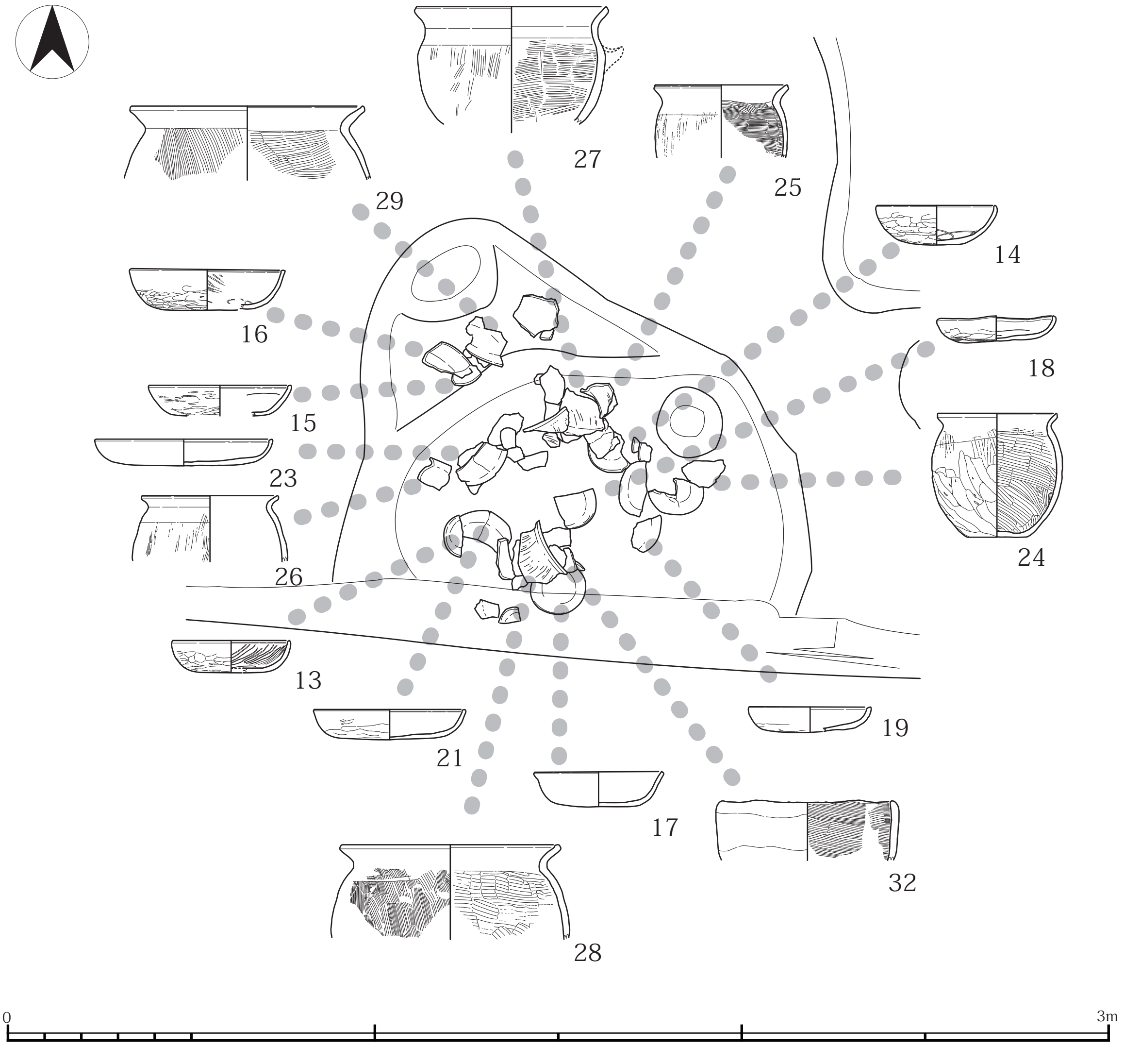


Fig.20　土坑 3 遺物出土状況 (1：20)

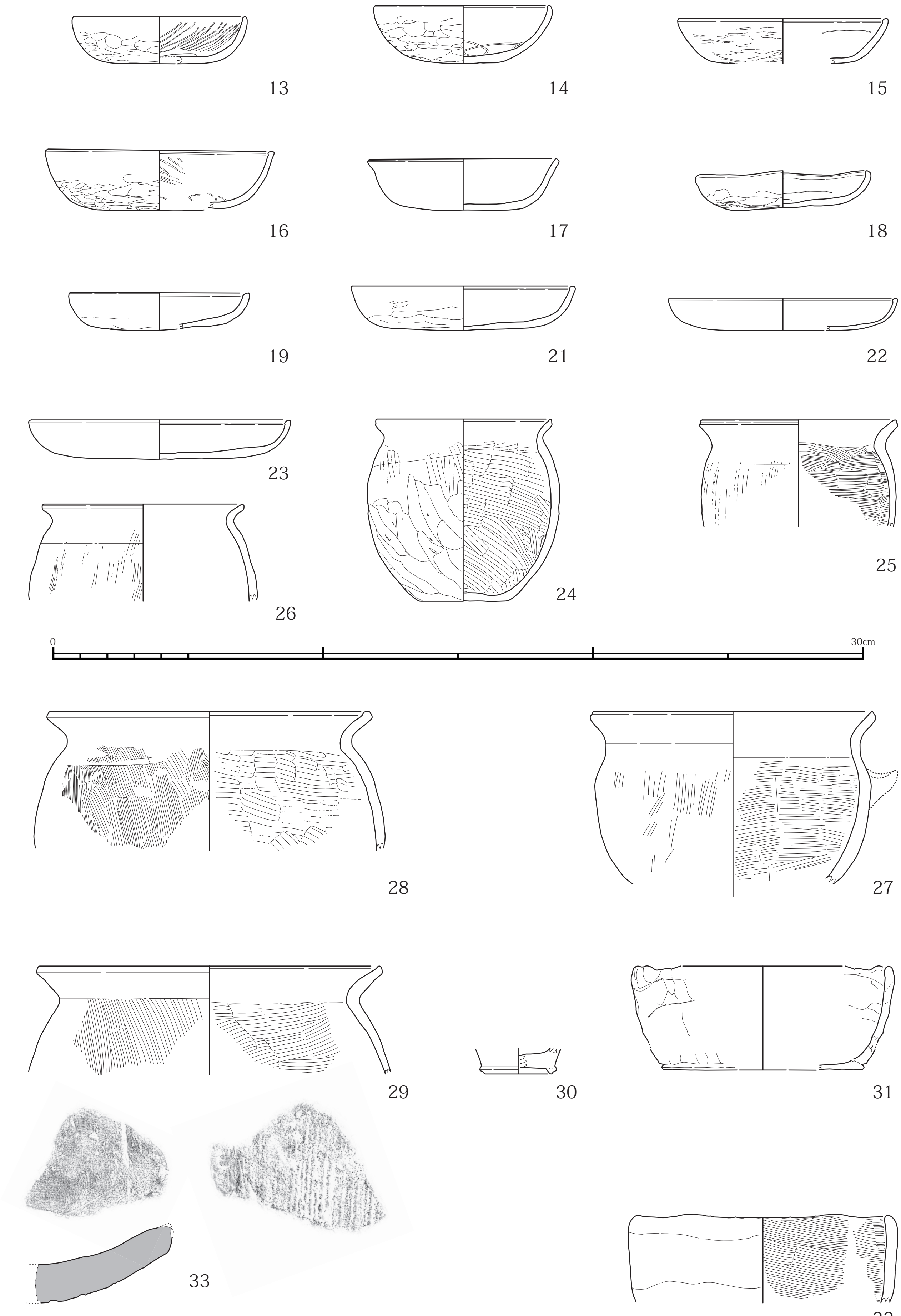


Fig.21　土坑 3 遺物 (1：4)

3　古代 (2)(Fig.22)

おおむね平安時代後期に属するもので，遺構は調査区のほぼ全域に分布する。土坑や柱穴などが検出されたが，建物は把握できなかった。

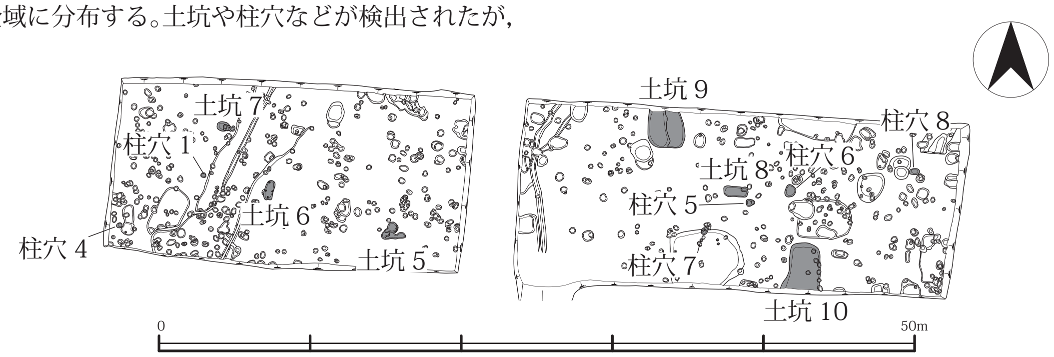


Fig.22　平安時代の遺構配置図 (1：500)

土坑 5(Fig.23 ～ 25)

掘立柱建物 1・2 から東南東へ約 14 mに位置する。柱穴様の不整円形土坑で，径 60 ～ 72㎝，深さ約 50㎝である。ロクロ土師器碗 (34 ～ 35)・ロクロ土師器小皿 (36 ～ 40)・ロクロ土師器耳皿 (41)・灰釉碗 (42 ～ 45) の他，土師器・ロクロ土師器・須恵器・灰釉陶器片が出土した。出土遺物から平安時代後期の埋没が考えられる。

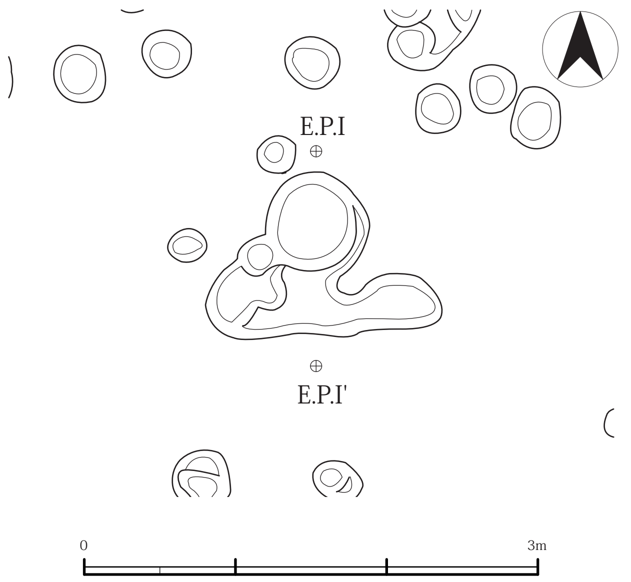


Fig.23　土坑 5 平面図 (1：50)

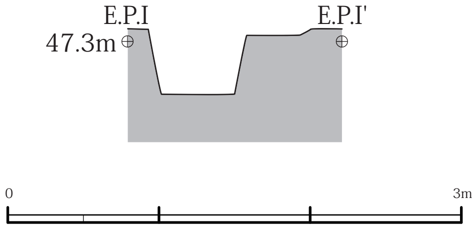


Fig.24　土坑 5 断面図 (1：50)

ロクロ土師器碗 (34 ～ 35)　34 は高台の無い碗である。底部は薄く，体部はやや膨らみながら緩やかに立ち上がる。

35 は擬高台を持つ碗で，体部は波打ちながら立ち上がり，口端部は外反する。

ロクロ土師器小皿 (36 ～ 40)　36 は薄い底部を持ち，口縁部は外反する。

37 は薄い底部を持ち，口縁部はわずかに外反する。

38 は厚めの底部を有し，体部は直線的に開く，口縁部はほんのわずかに外反する。

39 は大きな底部を有し，体部は直線的に開く。

40 は体部下方が膨らみ，口縁部は直線的に斜め外方に立ち上がる。

ロクロ土師器耳皿 (41)　擬高台を有する耳皿である。

灰釉陶器碗 (42 ～ 45)　42 は薄い底部に高い高台が付く。体部は滑らかに丸みを帯び，口縁部は軽く外反する。底部は全面ケズられる。

43 はやや深みのある碗である。高台はわずかに外反し，口縁部はわずかに外反する。底部には糸切り痕が残存する。

44 は底部を欠く。口端部は外反する。灰釉が浸け掛けされる。

45 は底部片である。高台は低く，底部には糸切り痕を留める。

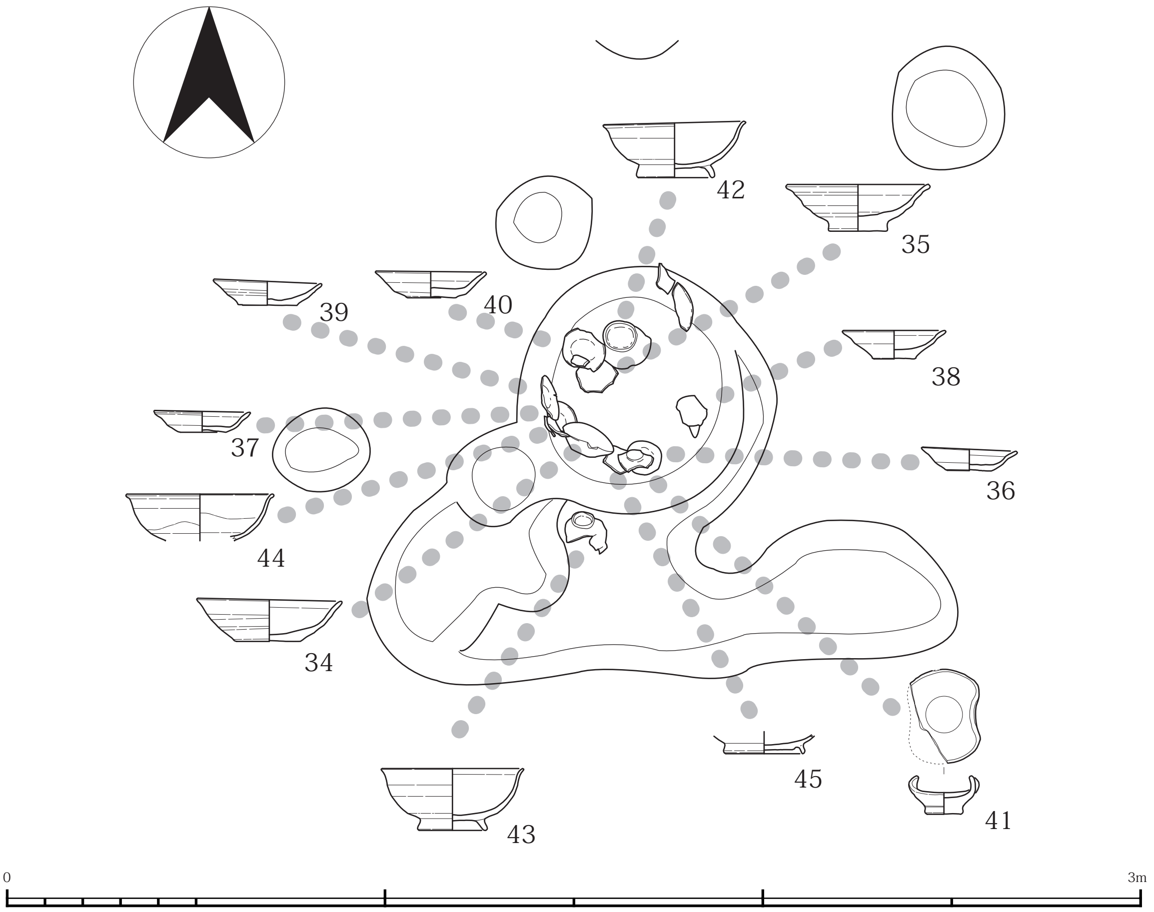


Fig.25　土坑 5 遺物出土状況 (1：20)

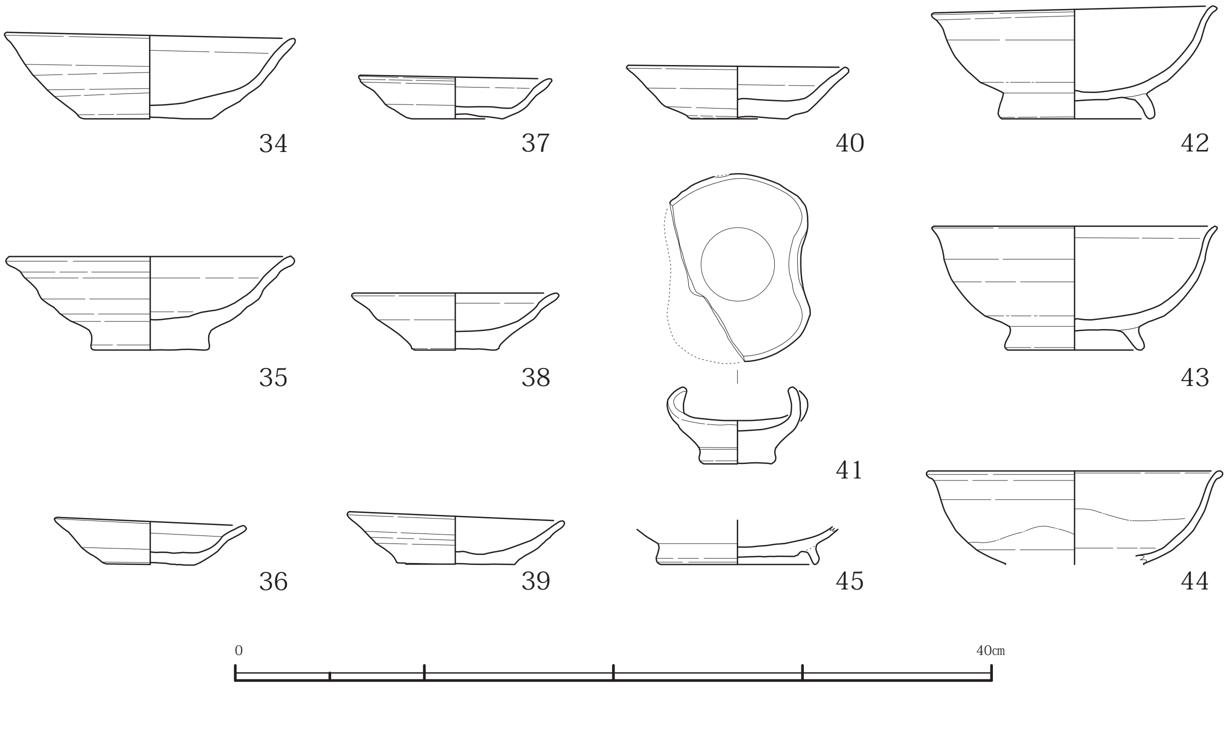


Fig.26　土坑 5 遺物 (1：4)

土坑 6(Fig.27)

土坑 5 から西北西へ 7.7 mに位置する。長軸 1.3m・短軸 0.6m・深さ 33㎝を測る長楕円形の土坑である。炭化物・鉄滓を含む。土師器鍋 (46 ～ 47)・ロクロ土師器小皿 (48)・灰釉陶器碗 (49)・緑釉陶器碗 (50) の他，土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器片が出土した。平安時代後期の埋没が考えられる。

土師器鍋 (46 ～ 47)　いわゆる清郷型鍋である。

46 は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁・突帯部分は丁寧にヨコナデされ，内面は横・斜方向にイタナデ状の調整がなされる。

47 は口縁部片である。突帯は口端部に接して貼り付けられている。口縁・突帯部分はヨコナデされ，内面はハケメ調整される。

ロクロ土師器小皿 (48)　口縁部片である。口縁部は大きく開く。

灰釉陶器碗 (49)　口縁部から体部にかけての破片である。口縁部はわずかに外反する。灰釉が浸け掛けされる。内外面に赤色顔料が付着する。

緑釉陶器碗 (50)　底部片である。土師質で，低い高台を有する。

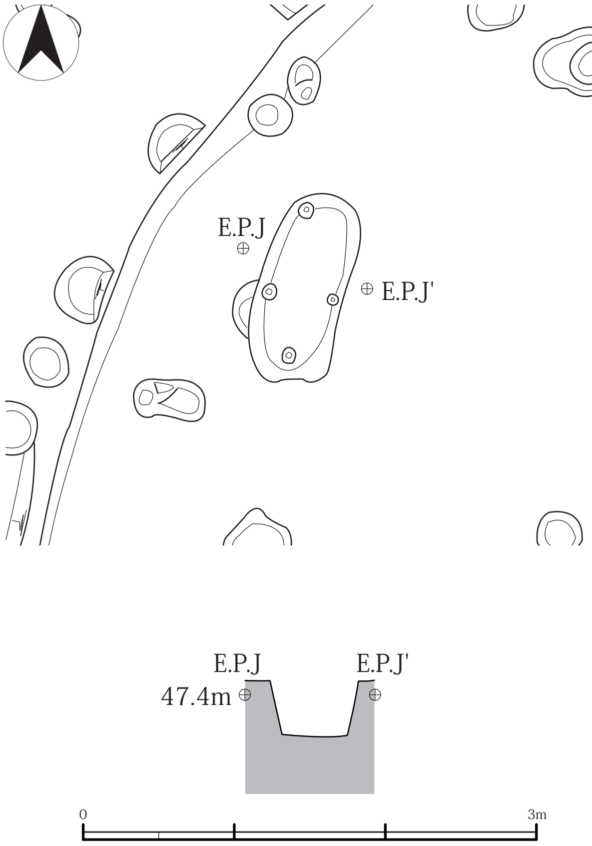


Fig.27　土坑 6 平面図・断面図 (1：50)

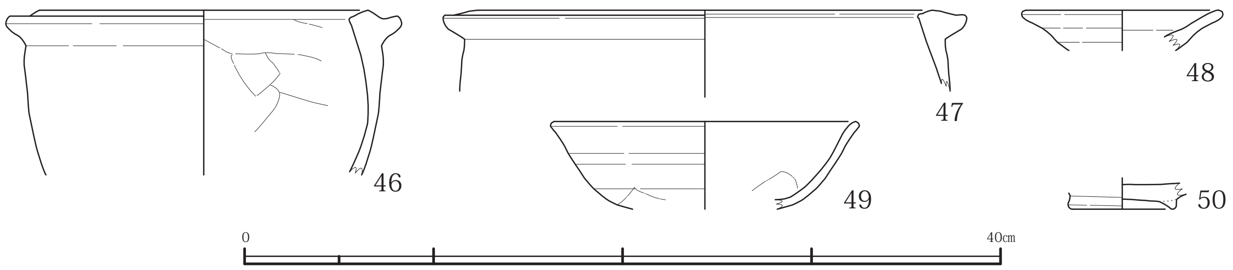


Fig.28　土坑 6 遺物 (1：4)

土坑 7 (Fig.29 ～ 30)

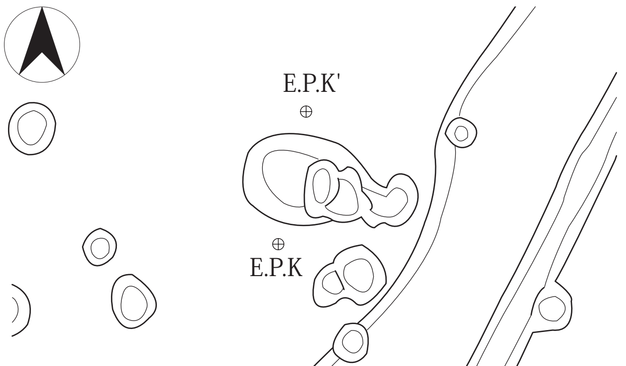


Fig.29　土坑 7 平面図 (1：50)

土坑 6 の北西 4.1 mに位置する。0.8m × 0.6 mの楕円形小土坑で，深さは 33㎝である。土師器碗 (51)・ロクロ土師器片口碗 (52)・ロクロ土師器小皿 (53 ～ 56) の他，土師器・灰釉陶器片が出土した。平安時代後期の埋没が考えられる。

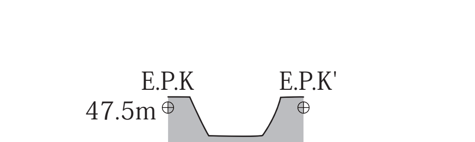


Fig.30　土坑 7 断面図 (1：50)

土師器碗 (51)　ハの字状に開く高台を有する。底部の器厚は極めて薄く，体部から口縁部にかけては厚みを増して直線的に口端に到る。

ロクロ土師器片口碗 (52)　擬高台を有する。体部下半は大きく膨らみ，口縁部は外反する。

ロクロ土師器小皿 (53 〜 56)　53 は厚い底部を有し，体部下半はやや膨らみ，口縁部はわずかに外反する。

54 はやや厚い底部を有し，口縁部は外反する。

55 は極めて厚い底部を有し，口縁部はやや外反する。

56 は体部が直線的で，口縁端部はわずかに外反する。

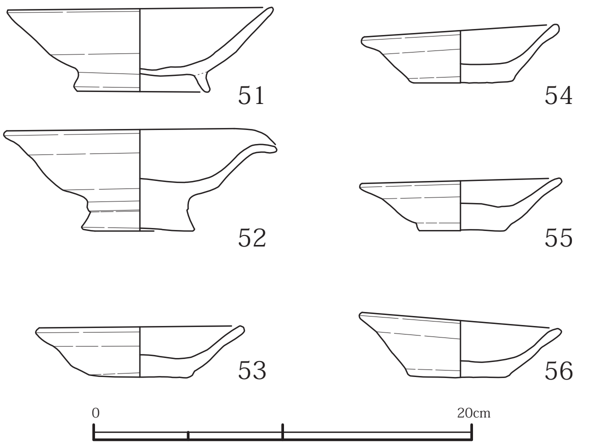


Fig.31　土坑 7 遺物 (1：4)

土坑 8(Fig.32 〜 33)

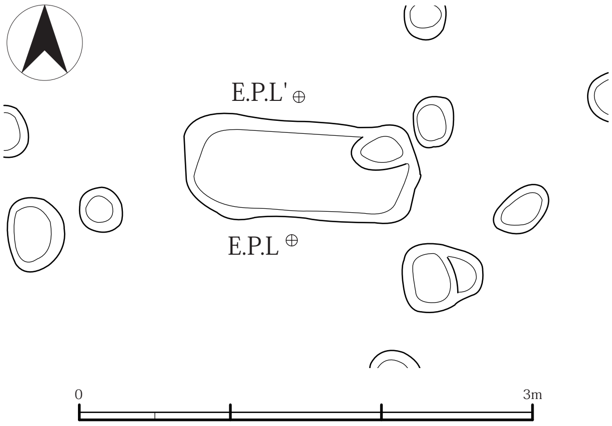


Fig.32　土坑 8 平面図 (1：50)

土坑 2 の北北東 2.5 mに位置する 0.67 m× 1.6m の長方形の土坑で，深さ約 16㎝である。底には厚さ 3㎝に亙って炭化物が堆積する。土師器甕 (57) の他, 土師器・灰釉陶器片が出土した。平安時代後期の埋没が考えられる。

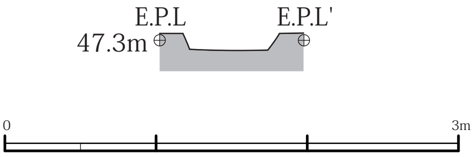


Fig.33　土坑 8 断面図 (1：50)

土師器甕 (57)　口縁部から胴部にかけての破片である。頸部は外側へ屈曲し，やや肥厚する口端部は面をなし，わずかに内側へ折り曲げられる。胴部上半外面は指押さえ痕が残り，内面は横にハケメ調整される。

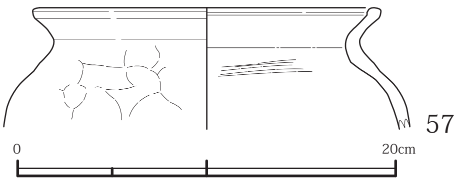


Fig.34　土坑 8 遺物 (1：4)

土坑 9(Fig.35 〜 36)

土坑 8 の北西 3.8 mに位置する。2.3 m× 2.4 m以上の隅丸方形の土坑で，北辺は調査区外となる。東半はテラス状で，西半は深さ 30㎝である。埋土はほとんど礫を含まないクロボク土である。土師器甕（58）・土錘（59）の他，土師器・灰釉陶器片が出土した。平安時代後期の埋没が考えられる。

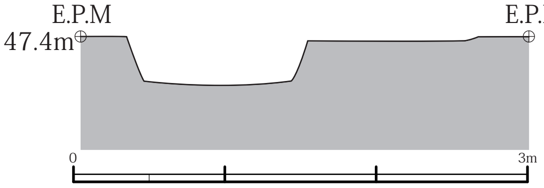


Fig.36　土坑 9 断面図 (1：50)

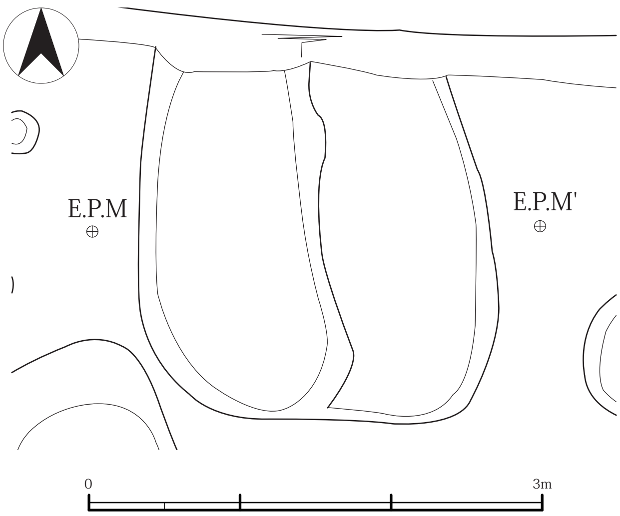


Fig.35　土坑 9 平面図 (1：50)

土師器甕 (58)　口縁部から胴部にかけての破片である。胴部上方で膨らみ，頸部は明瞭に屈曲し，やや厚みのある口縁部は端部にてわずかに内側に折り曲げられる。胴部外面は指押さえ痕が残存する。
土錘（59）　細型の土錘で，中央部はゆるやかに厚みを増す。

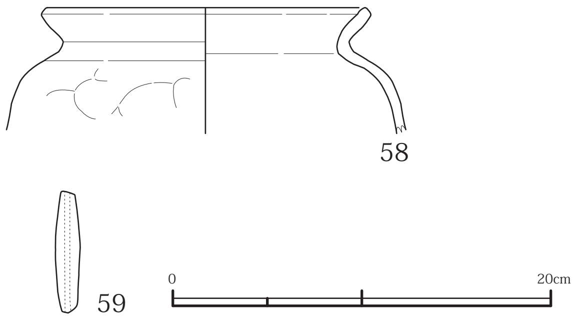


Fig.37　土坑 9 遺物 (1：4)

土坑 10(Fig.38 ～ 39)
　土坑 1 の南に隣接する。平面形は方形に近く，南端は調査区外に及ぶ。短軸 1.9 m×長軸 3.0 m以上で，深さは 14㎝である。土師器皿 (60)・土師器甕 (61)・ロクロ土師器碗 (62)・灰釉陶器碗 (63 ～ 64) の他，須恵器・灰釉陶器・製塩土器片が出土している。平安時代後期の埋没が考えられる。

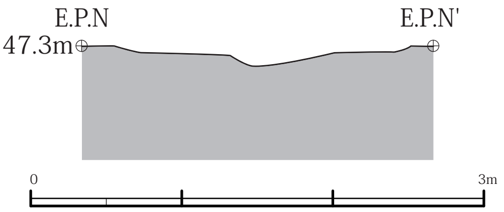


Fig.39　土坑 10 断面図 (1：50)

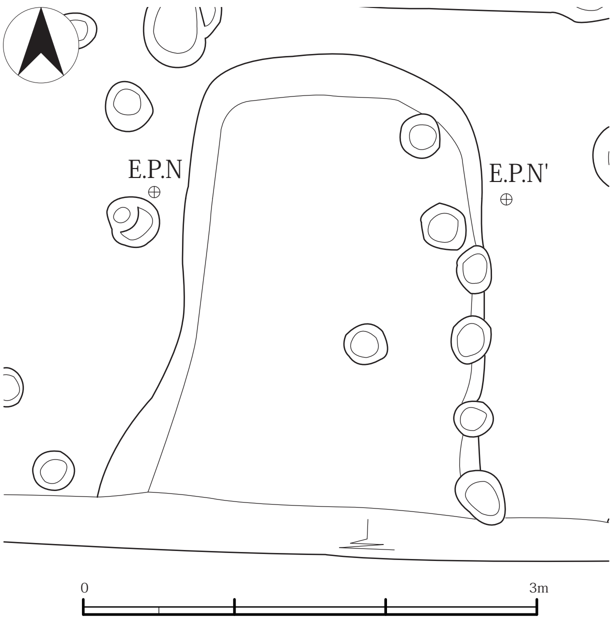


Fig.38　土坑 10 平面図 (1：50)

土師器皿 (60)　小型の皿の破片で，混入遺物である。体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり，口縁端部には軽く段を有する。体部外面は横方向にヘラミガキされ，内面には粗雑な螺旋状暗文を有する。
土師器甕 (61)　口縁部片である。口縁部はあまり開くことなく立ち上がる。
ロクロ土師器碗 (62)　碗の底部と考えられる。厚めの底部片である。
灰釉陶器碗 (63・64)　ともに底部付近の破片。三角高台が付く。

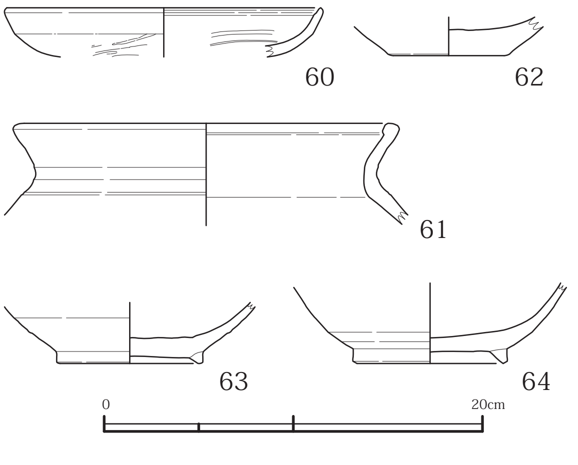


Fig.40　土坑 10 遺物 (1：4)

柱穴１・４～8(Fig.22)　建物としてまとまらなかったものの実測可能な資料を含む遺構があった。小型の土坑である可能性もあるが，一応柱穴として報告する。柱穴１の八稜鏡（65)，柱穴６の灰釉陶器碗（71) などは意図的に埋納された可能性がある。遺物混入の疑いもあるその他の柱穴については，より後代の遺構であるかもしれない。

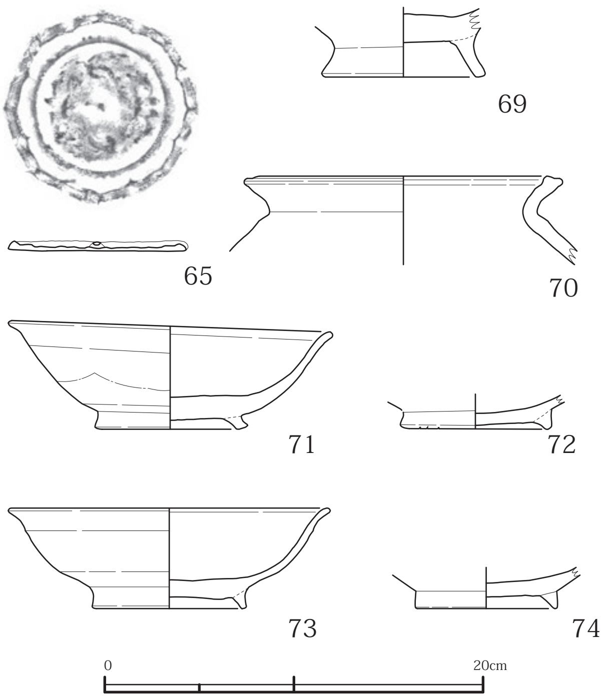


Fig.41　柱穴１・４～８遺物 (1：4)

銅鏡 (65)　径 30㎝程の不整円形を呈する柱穴１から出土した八稜鏡の完形資料である。出土位置は遺構底面から 20㎝程上位で，鏡面を上に向けていた。風化が激しく，全面が緑白色の緑青に覆われ，文様は判然としない。

ロクロ土師器碗 (69)　径 32㎝・深さ 23㎝の柱穴４出土。高い高台を有する。

土師器甕 (70)　径 45 ～ 50㎝の柱穴５出土。

灰釉陶器碗 (71 ～ 74)　71・72 は径 60 ～ 70㎝の不整円形を呈する柱穴６から出土。73 は柱穴７から，74 は柱穴８から出土。ほぼ完形の 71 は灰釉が浸け掛けされる。73 は釉が認められない。

4　中世 (Fig.42)

調査区西半を中心に鎌倉時代の遺構や遺物が検出された。掘立柱建物２・3，土坑 11，土坑 12，溝１・2，柱穴２・３・９・11 などがある。

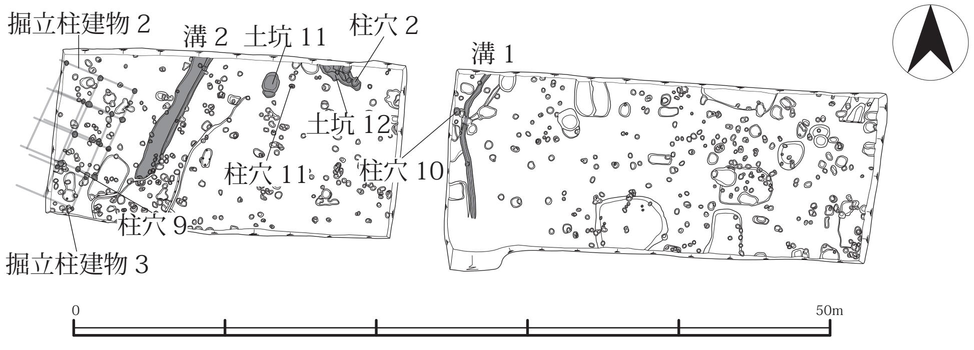


Fig.42　鎌倉時代の遺構配置図 (1：500)

掘立柱建物 2・3(Fig.43 ～ 44)

調査区西辺から検出された。ともに総柱掘立柱建物で，互いの新旧関係は不明である。溝２とよく似た方位を示す。

掘立柱建物２は梁行３間で，棟方向はW 25゜Nである。柱間は梁行が２～ 2.2 m・桁行が 2.4 mである。柱穴は径 30 ～ 45㎝・深さ 20 ～ 40㎝で，柱痕は明瞭でない。柱穴３からは土師器小皿 (67)・ロクロ土師器小皿 (68) が出土している他，柱穴 12 から土師器片が，柱穴 13 から土師器・須恵器・灰釉陶器片が，柱穴 14 からロクロ土師器・須恵器・灰釉陶器片が，柱穴 15 から土師器・灰釉陶器片が，柱穴 16 から土師器・灰釉陶器片が，柱穴 17 から土師器・須恵器・瓦片が出土している。出土遺物の多くは建物建設時に混入した前代の遺物と見なされる。

掘立柱建物３は梁行３間と考えられ，棟方向はW 25゜Nである。柱間は梁行 2.2 ～ 2.5 m・桁行 2.1 mで，深さは約 10 ～ 40㎝である。

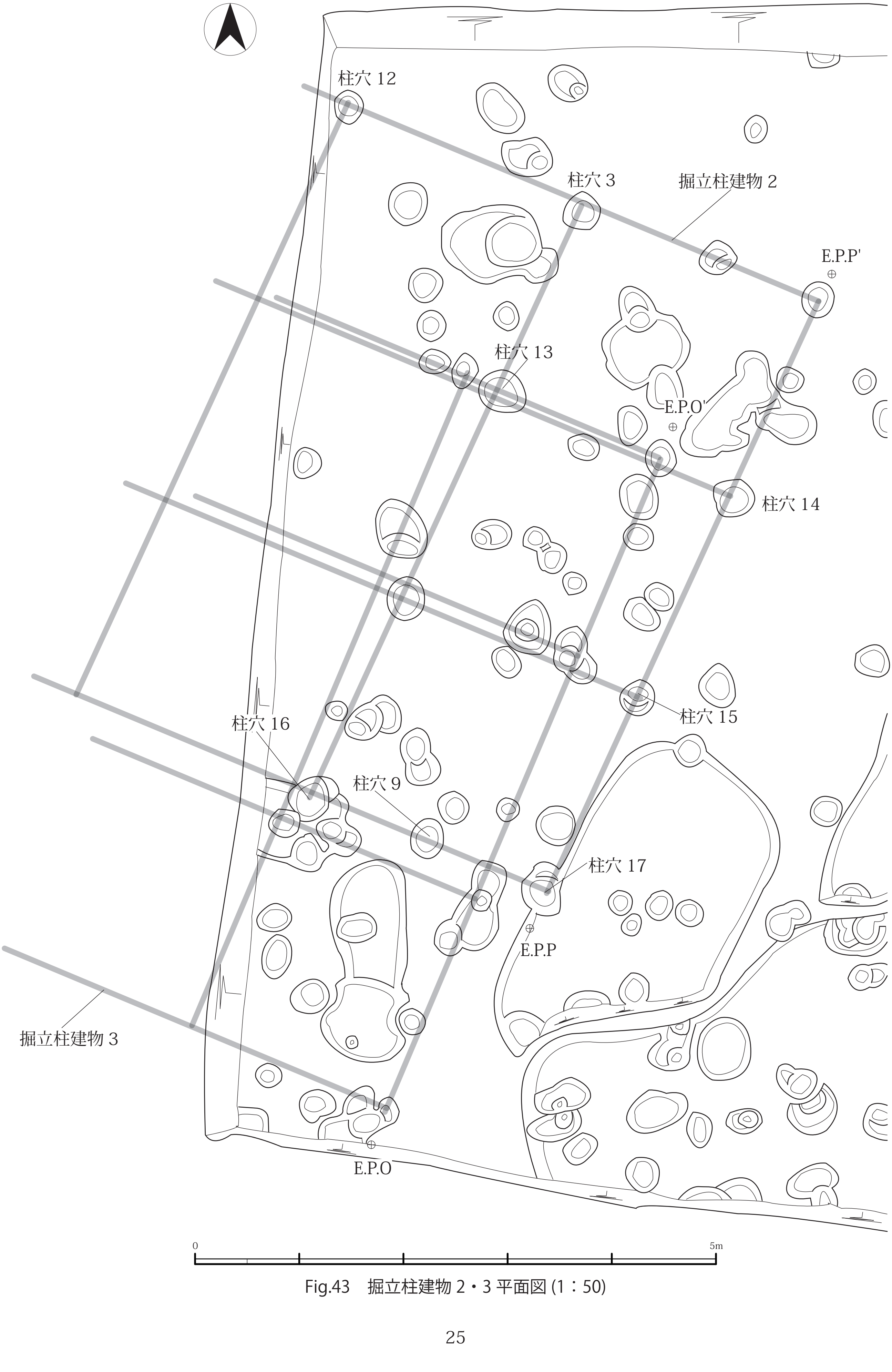


Fig.43　掘立柱建物 2・3 平面図 (1：50)

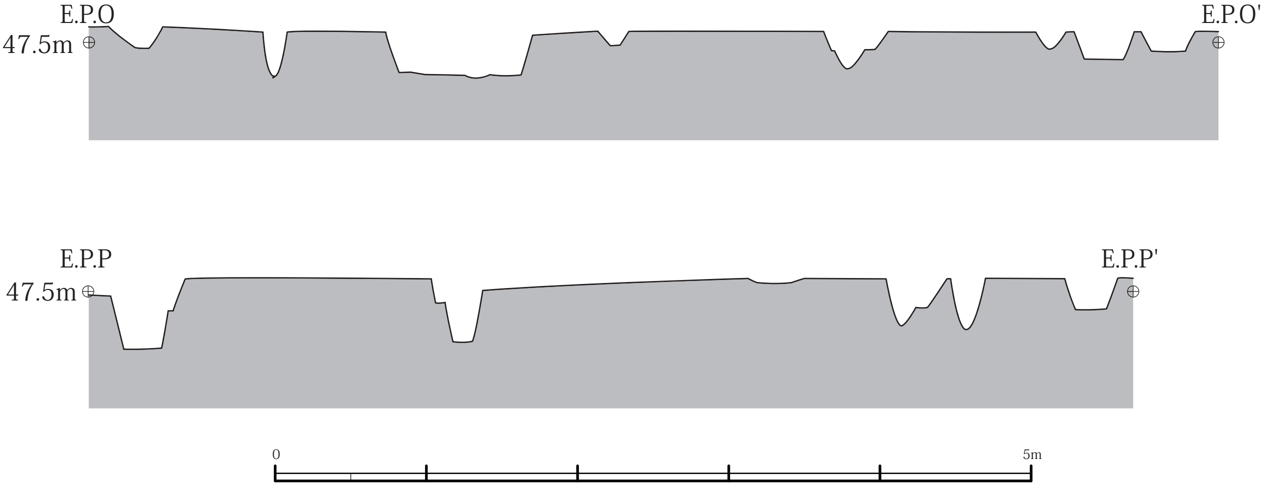


Fig.44　掘立柱建物 2・3d 断面図 (1：50)

土師器小皿 (67)　柱穴 3 出土の浅い小皿。口縁部はヨコナデされる。

柱穴 2・9 〜 11(Fig.42)

建物としてのまとまりはとらえられなかったが，図化可能な遺物が出土した。完形資料や残存部の多い資料は意図的に埋納された可能性が考えられる。

ロクロ土師器小皿 (68)　柱穴 3 出土 (Fig.48)。厚い底部を持ち，底部から口端部にかけて徐々に厚さを減ずる。

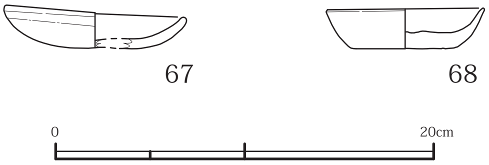


Fig.45　柱穴 3 遺物 (1：4)

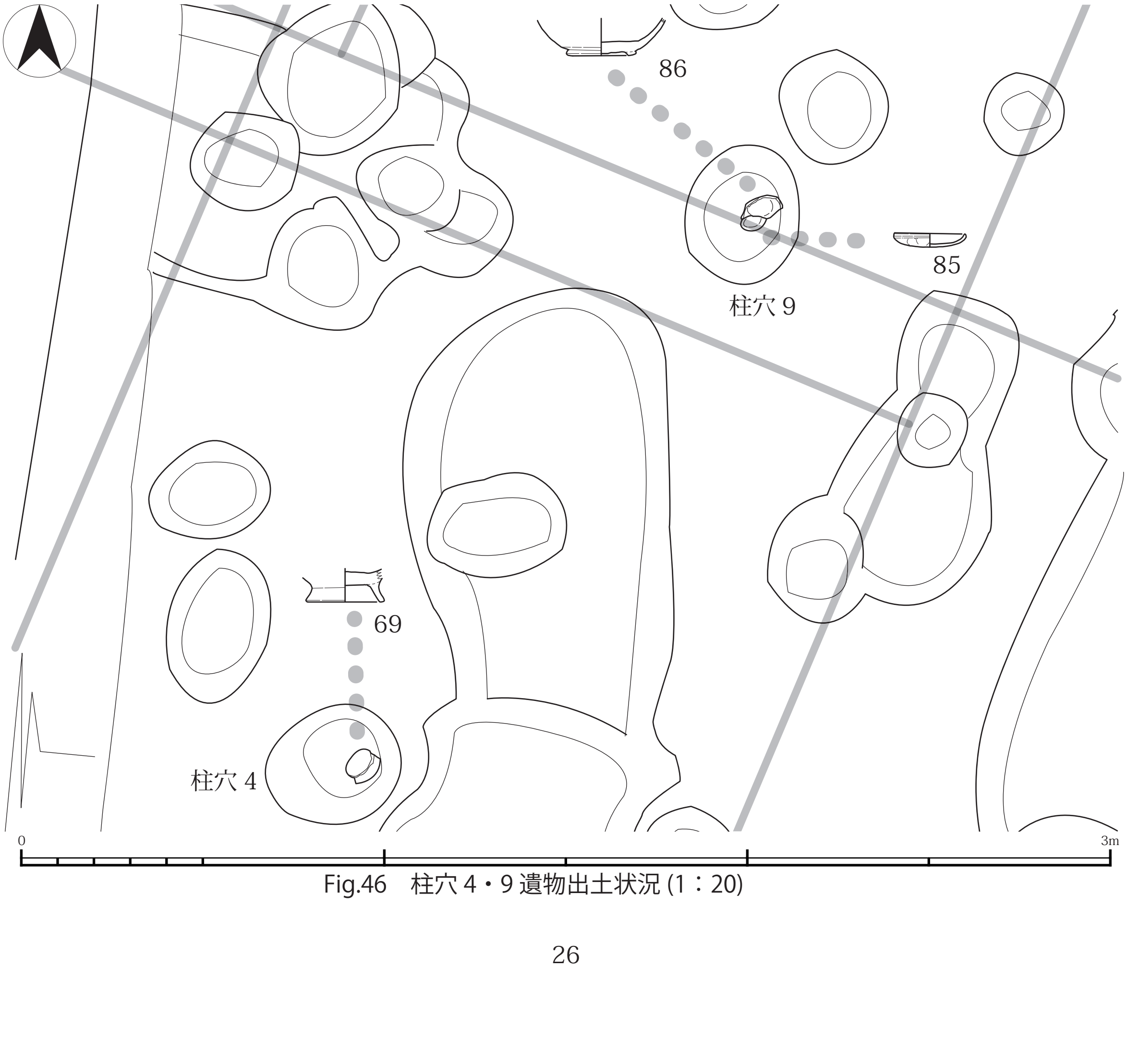


Fig.46　柱穴 4・9 遺物出土状況 (1：20)

土師器坏 (66)　柱穴２出土。口縁部はヨコナデされるが，大きく波打つ。

土師器小皿 (85)　柱穴９出土 (Fig.46) の完形資料。口縁部から底部内面近くまでヨコナデされる。

山茶碗 (86)　柱穴９から土師器小皿 (85) と重なるように出土 (Fig.46)。口縁部を欠き，低い高台を有する。

山茶碗 (87)　柱穴 10 出土。底部２分の１を残す。

山皿 (88)　柱穴 11 出土。底部２分の１を残す。

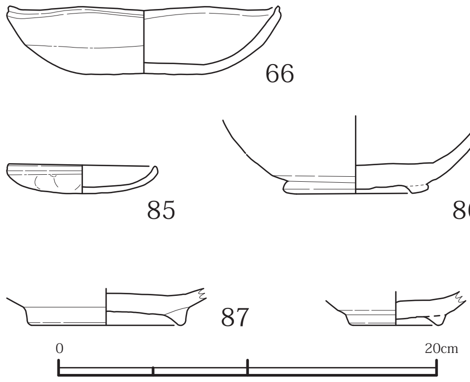


Fig.47　柱穴２・９～ 11 遺物 (1：4)

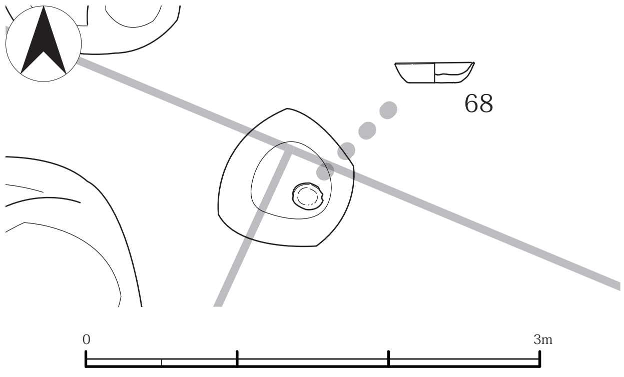


Fig.48　柱穴３遺物出土状況 (1：20)

土坑 11(Fig.49 ～ 50)

掘立柱建物２の 8.3 m 東から検出された。長径 1.7m・短径 1.1m・深さ 33㎝。土師器坏 (75)・小皿 (76)・山茶碗 (77・78)・山皿 (79) が出土した。

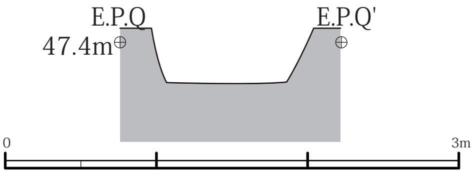


Fig.50　土坑 11 断面図 (1：50)

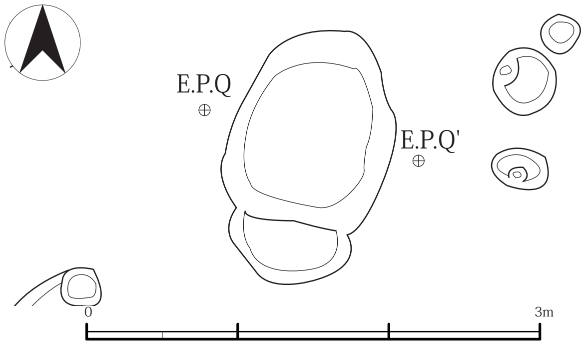


Fig.49　土坑 11 平面図 (1：50)

土師器坏 (75)　口縁から底部にかけての破片。薄手で，口縁部付近のみヨコナデされる。

土師器小皿 (76)　口縁部はヨコナデされ，底部は未調整。

山茶碗 (77・78)　いずれも低い三角高台を伴う。77 は高台に籾痕を少し留める。

山皿 (79)　厚い底部に高台を伴う完形資料。

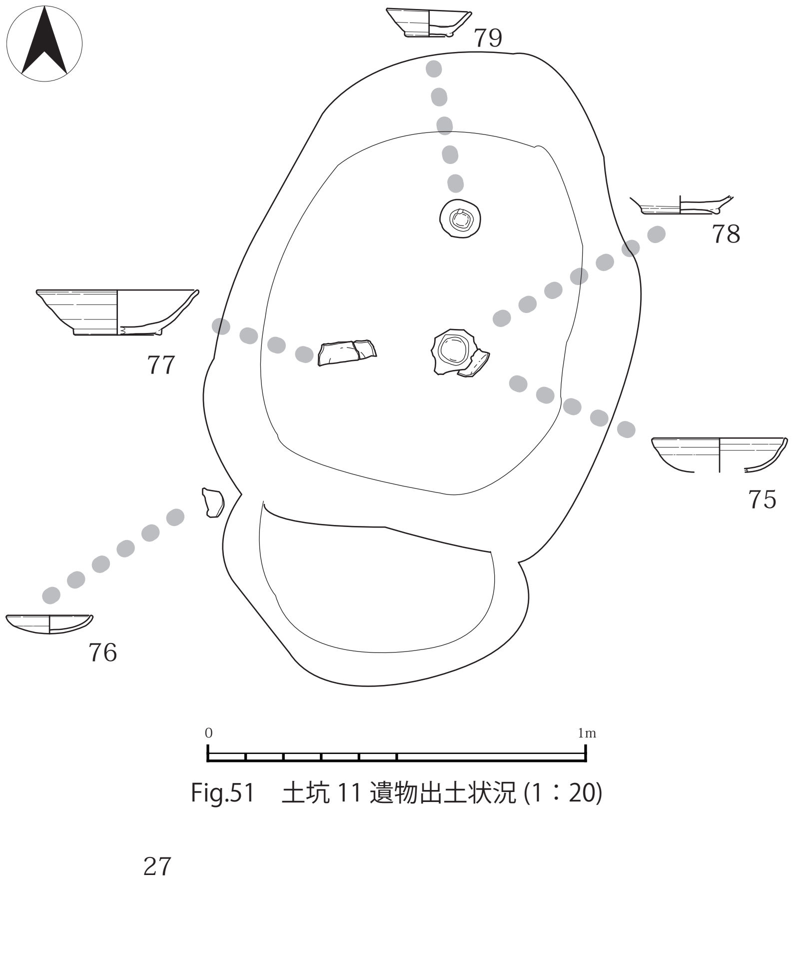


Fig.51　土坑 11 遺物出土状況 (1：20)

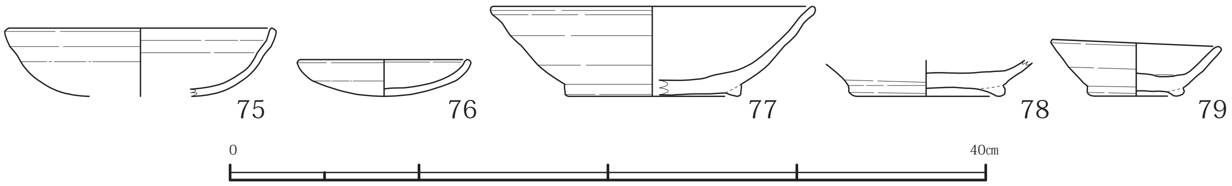


Fig.52　土坑 11 遺物 (1：4)

土坑 12(Fig.53)

　掘立柱建物 1 を切る不整形の土坑。短径 1.2 m・深さ 36㎝で，北西端は調査区外に続く。山茶碗 (80) などが出土した。

山茶碗 (80)　三角高台を有し，口縁部 4 分の 3 を欠く。

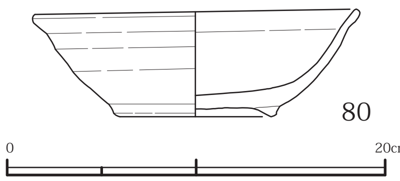


Fig.54　土坑 12 遺物 (1：4)

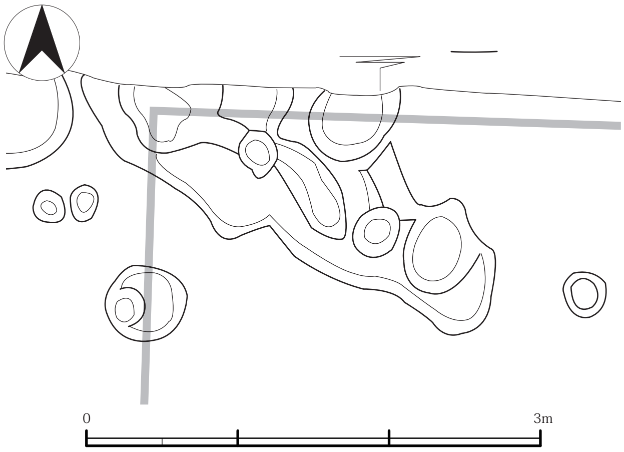


Fig.53　土坑 12 平面図 (1：50)

溝 1(Fig.42)

　調査区中央部で検出された南北溝である。北端は調査区外に続き，南端は調査区内で途切れる。当調査区においては最東端に位置する鎌倉時代の遺構である。幅 40cm・深さ 14 ～ 17㎝を測る。山皿 (81) などが出土した。

山皿 (81)　口縁部 5 分の 2 を留める破片。高台は無く，器壁は極めて薄い。

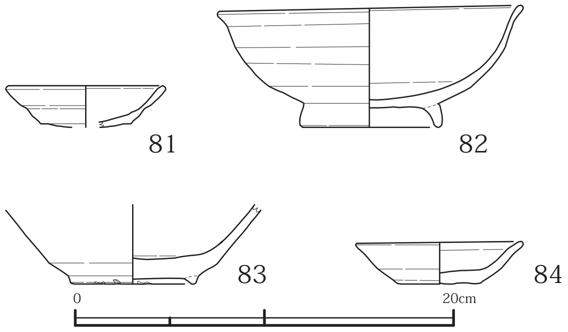


Fig.55　溝 1・2 遺物 (1：4)

溝 2(Fig.42)

　調査区西端付近から検出された南北溝で，方向は N 26° E。幅 0.9 ～ 1.4 m・深さ 6 ～ 12㎝で，東辺部が深くなる。北端は調査区外に続き，南端は他の落ち込みに切られる。掘立柱建物 2・3 とほぼ同じ方位を示す。灰釉陶器碗 (82)・山茶碗 (83)・山皿 (84) などが出土した。

灰釉陶器碗 (82)　ほぼ完形。三日月高台を有し，器壁は薄い。灰釉は口縁部近くのみ浸け掛けされる。遺構の埋没時期を遡る資料と考えられ，混入遺物である可能性もある。

山茶碗 (83)　口縁部を欠く。低い三角高台には籾痕が多く認められる。

山皿 (84)　無高台のもので，4 分の 3 を留める。

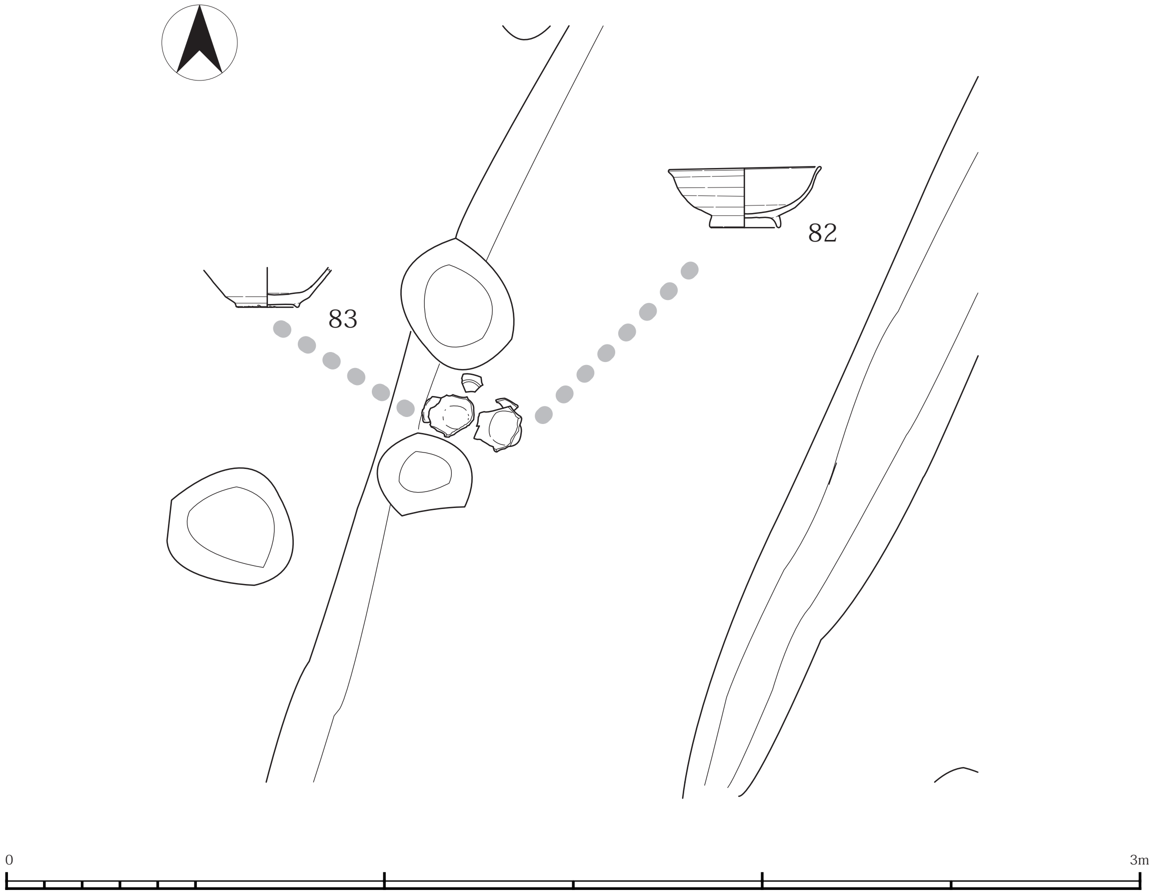


Fig.56　溝 2 遺物出土状況 (1：20)

その他の遺物

その他包含層から出土した遺物のうち山皿 (89 〜 91) や砥石 (92)・石銙 (93) など図示可能な遺物があった。

山皿 (89 〜 91)　無高台の完形資料。

砥石 (92)　頁岩またはチャート素材。板状に研磨加工されたもので，主な使用面は表裏の 2 面と思われる。欠損部は調査時のものである。

石銙 (93)　鉈尾あるいは巡方の一部。結晶片岩製で，表面が白色部分となるように加工されている。大部分を欠損し，かがり穴を有する一角のみが残存する。

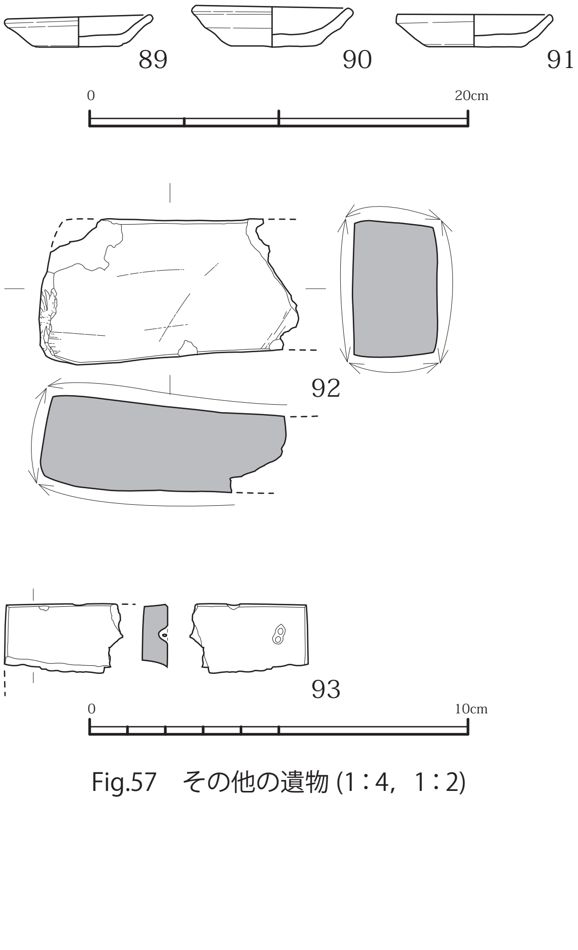


Fig.57　その他の遺物 (1：4，1：2)

Tab.1　土器

No.	種別	器形	遺構	調査時記号	口径㎜	器高㎜	底径㎜	焼成	胎土の特徴	色調	残存度	調整その他
1	土師器	皿	竪穴建物１	ST01 №１	-237	28	―	良好	密。砂礫多い	2.5YR5/6	４分の１	外面ケズリ
2	土師器	坏	土坑１	SK06 №６	91	26	―	並	粗。赤色粒子含む	10YR8/3	完形	
3	土師器	坏	土坑１	ST02 №４	133	40	―	良好	密。砂礫多い	10YR8/4	完形	
4	土師器	甕	土坑１	ST02	○	○	89	良好	砂粒やや多い	10YR7/3	口縁欠	外面下半ケズリ
5	土師器	把手付甕	土坑１	ST02 №２	353	○	―	良好	粗。砂礫多い	10YR8/3	４分の１	
6	須恵器	高盤	土坑１	SK06 №３	198	○	○	並	粗。砂礫多い	5Y6/1	口縁一部欠	７と同一個体か
7	須恵器	高盤	柱穴12	Pit48	○	○	-118	並	粗。砂礫多い	5Y6/1	４分の１	６と同一個体か
8	須恵器	平瓶	土坑１	ST02 №１	○	○	105	良好	砂礫含む	10Y4/1	口縁・把手欠	
10	土師器	坏	土坑２	ST03	-140	41	―	不良	赤色粒子含む	5YR6/6	４分の１	外面ミガキ。放射状暗文あり
11	土師器	甕	土坑２	ST03 №１	158	138	88	不良	砂粒含む	10YR7/2	一部欠	外面下半ケズリ
13	土師器	坏	土坑３	SK05 №１	-130	35	―	良好	砂礫少し含む	7.5YR5/4	３分の１	外面ミガキ。放射・螺旋状暗文あり
14	土師器	坏	土坑３	SK05 №26	133	43	―	良好	砂粒含む	5YR5/6	２分の１	外面ミガキ。螺旋状暗文あり
15	土師器	坏	土坑３	SK05 №14	-156	33	―	良好	砂粒少し含む	5YR6/8	４分の１	外面ミガキ。螺旋状暗文あり
16	土師器	坏	土坑３	ＳＫ０５ №11･13	170	45	―	良好	砂粒含む	5YR6/6	２分の１	外面ケズリ・ミガキ。放射・螺旋状暗文あり
17	土師器	坏	土坑３	SK05 №36	142	39	―	不良	砂礫多い	10YR8/3	完形	外面ナデ
18	土師器	皿	土坑３	ＳＫ０５ №24･35･37	130	30	―	良好	砂礫少し含む	5YR6/6	一部欠	外面ケズリ・ミガキ。螺旋状暗文あり
19	土師器	皿	土坑３	ＳＫ０５ №22･38	133	28	―	並	砂粒・赤色粒子含む	5YR6/6	３分の２	外面ケズリ
20	土師器	皿	土坑１	SK06 №７	152	23	―	不良	砂粒・赤色粒子含む	7.5YR7/6	４分の３	外面ナデ
21	土師器	皿	土坑３	ＳＫ０５ №23・33	166	33	―	良好	砂粒・赤色粒子含む	5YR6/6	一部欠	外面ケズリ・ミガキ
22	土師器	皿	土坑３	SK05 №28	190	24	―	不良	砂粒含む	2.5YR6/8	４分の１	

№.	種別	器形	遺構	調査時記号	口径mm	器高mm	底径mm	焼成	胎土の特徴	色調	残存度	調整その他
23	土師器	皿	土坑3	ＳＫ０５ №31・32	174	29	―	並	砂礫含む	5YR4/4	2分の1	外面ミガキ
24	土師器	甕	土坑3	SK05 №21	-131	135	66	良好	砂礫多い	10YR7/4	口縁3/4欠	外面下半ケズリ
25	土師器	甕	土坑3	SK05 №7	-156	○	―	良好	砂礫含む	10YR4/2	4分の1	内外面ハケ
26	土師器	甕	土坑3	SK05 №2	-150	○	―	不良	砂粒含む	7.5YR8/6	5分の1	外面ハケ
27	土師器	把手付甕	土坑3	SK05 №6	-212	○	―	良好	砂礫多い	10YR7/3	5分の1	内外面ハケ
28	土師器	甕	土坑3	SK05 №19	-242	○	―	良好	砂礫含む	10YR6/4	4分の1	内外面ハケ
29	土師器	甕	土坑3	SK05 №12	-256	○	―	不良	砂多い	7.5YR7/6	8分の1	内外面ハケ
30	須恵器	壺	土坑3	SK05	○	○	56	良好	砂含む	5Y5/1	底2分の1	
31	製塩土器		土坑3	SK05	-192	○	○	良好	赤色粒子・砂含む	10YR7/3	4分の1	志摩式
32	製塩土器		土坑3	ＳＫ０５ №15・16	-200	○	○	並	砂礫多い	5YR7/6	口縁2分の1	志摩式
34	土師器	碗	土坑5	SK21 №4	153	46	70	不良	赤色粒子含む	10YR8/3	ほぼ完形	ロクロ製
35	土師器	碗	土坑5	SK21 №8	-152	50	64	良好	雲母片多い	10YR5/2	完形	ロクロ製.柱状高台
36	土師器	小皿	土坑5	SK21 №11	101	25	49	並	赤色粒子含む	10YR7/3	完形	ロクロ製
37	土師器	小皿	土坑5	SK21 №13	102	23	51	不良	赤色粒子多い	10YR7/4	ほぼ完形	ロクロ製
38	土師器	小皿	土坑5	SK21 №6	-110	30	46	不良	砂含む	2.5Y8/3	口縁一部	ロクロ製
39	土師器	小皿	土坑5	SK21 №2	114	28	62	良好	砂多い	5YR7/8	口縁5分の4	ロクロ製
40	土師器	小皿	土坑5	SK21 №7	117	28	53	不良	砂礫含む	10YR7/4	ほぼ完形	ロクロ製
41	土師器	耳皿	土坑5	SK21 №5	―	41	41	不良	赤色粒子含む	10YR8/3	3分の2	ロクロ製.柱状高台
42	灰釉陶器	碗	土坑5	ＳＫ２１ №9・10	151	60	83	良好	砂礫含む	5YR8/1	完形	
43	灰釉陶器	碗	土坑5	SK21 №1	-151	66	74	良好	砂多い	5Y7/1	口縁一部	
44	灰釉陶器	碗	土坑5	SK21 №3	-157	○	○	良好	砂礫含む	5Y8/1	口縁3分の1	
45	灰釉陶器	碗	土坑5	SK21 №12	○	○	86	良好	砂少し含む	5Y8/1	底のみ	
46	土師器	甕	土坑6	SK19	-174	○	―	良好	砂多い	5YR4/4	口縁のみ一部	清郷型
47	土師器	甕	土坑6	SK19	-278	○	―	良好	砂礫多い	10YR6/4	口縁のみ一部	清郷型
48	土師器	小皿	土坑6	SK19	-106	○	○	並	礫含む	10YR7/3	口縁のみ4分の1	ロクロ製
49	灰釉陶器	碗	土坑6	SK19	-106	○	○	不良	砂多い	2.5Y8/1	底欠．4分の1	灰釉浸け掛け

No.	種別	器形	遺構	調査時記号	口径mm	器高mm	底径mm	焼成	胎土の特徴	色調	残存度	調整その他
50	緑釉陶器		土坑６	SK19	○	○	57	不良	赤色粒子含む	10YR8/4	底のみ	
51	土師器	碗	土坑７	SK16 №５	141	45	72	不良	砂礫多い	10YR8/3	ほぼ完形	
52	土師器	片口碗	土坑７	SK16 №６	145	55	60	並	砂礫多い	10YR6/1	ほぼ完形	ロクロ製
53	土師器	小皿	土坑７	SK16 №４	101	28	55	不良	砂少し含む	7.5YR8/6	完形	ロクロ製
54	土師器	小皿	土坑７	SK16 №３	105	31	54	並	砂礫少し含む	7.5YR8/6	完形	ロクロ製
55	土師器	小皿	土坑７	SK16 №２	107	28	46	並	砂含む	7.5YR7/6	口縁２分の１	ロクロ製
56	土師器	小皿	土坑７	SK16 №１	-107	35	49	並	砂礫含む	10YR6/2	口縁２分の１	ロクロ製
57	土師器	甕	土坑８	SK07	-184	○	－	不良	礫含む	2.5Y8/2	口縁一部	体部内面ヨコハケ
58	土師器	甕	土坑９	SK09	-174	○	－	不良	砂礫多い	2.5Y8/3	口縁４分の１	
60	土師器	皿	土坑１０	SK04	-168	○	－	並	雲母片・赤色粒子含む	5YR6/6	口縁一部	螺旋状暗文あり
61	土師器	甕	土坑１０	SK04	-204	○	－	良好	並	7.5YR6/2	口縁一部	
62	土師器	碗	土坑１０	SK04	○	○	-60	不良	砂礫多い	10YR7/3	底５分の２	ロクロ製
63	灰釉陶器	碗	土坑１０	SK04	○	○	78	不良	砂多い	5Y8/1	底３分の２	
64	灰釉陶器	碗	土坑１０	SK04	○	○	82	並	砂礫含む	5Y8/1	底５分の３	
66	土師器	坏	柱穴２	Pit139	146	36	－	並	並	10YR7/3	５分の３	
67	土師器	小皿	柱穴３	Pit78	97	23	－	並	雲母片多い	10YR7/4	一部欠	
68	土師器	小皿	柱穴３	Pit78 №１	84	21	56	不良	砂礫多い	7.5YR7/8	口縁２分の１	ロクロ製
69	土師器	碗	柱穴４	Pit100 №１	○	○	86	不良	砂多い	10YR8/4	底のみ	ロクロ製
70	土師器	甕	柱穴５	Pit23	-169	○	－	良好	砂多い	10YR7/3	口縁４分の１	
71	灰釉陶器	碗	柱穴６	Pit21	172	58	81	良好	礫含む	5Y7/1	ほぼ完形	灰釉浸け掛け
72	灰釉陶器	碗	柱穴６	Pit21	○	○	80	良好	黒色粒子含む	5Y8/1	底のみ	
73	灰釉陶器	碗	柱穴７	Pit56	-190	53	82	並	精良	7.5Y7/1	口縁５分の１	
74	灰釉陶器	碗	柱穴８	Pit2	○	○	-76	並	砂含む	5Y7/1	底４分の１	
75	土師器	坏	土坑１１	SK20 №３	-144	○	－	並	礫含む	10YR8/4	口縁４分の１	
76	土師器	小皿	土坑１１	SK20 №５	-92	20	－	並	砂含む	7.5YR8/6	口縁３分の１	
77	山茶碗		土坑１１	SK20 №１	-172	48	94	良好	良好	5Y7/1	２分の１	
78	山茶碗		土坑１１	SK20 №２	○	○	83	良好	砂礫含む	5Y8/1	底のみ	

№.	種別	器形	遺構	調査時記号	口径㎜	器高㎜	底径㎜	焼成	胎土の特徴	色調	残存度	調整その他
79	山皿		土坑１１	SK20 №４	91	30	52	良好	粗	2.5Y8/1	完形	
80	山茶碗		土坑１２	SK22	-173	57	86	並	砂礫含む	5Y7/1	口縁４分の１	
81	山皿		溝１	SD01	-85	○	-48	並	砂多い	2.5Y8/1	口縁５分の２	
82	灰釉陶器	碗	溝２	SD03 №２	162	65	75	並	砂礫含む	5Y7/1	ほぼ完形	
83	山茶碗		溝２	SD03 №１	○	○	72	並	砂礫多い	5Y8/1		
84	山皿		溝２	SD03	89	23	44	不良	砂礫多い	10YR7/1	４分の３	
85	土師器	小皿	柱穴９	Pit93	80	16	―	並	雲母片含む	10YR8/3	完形	
86	山茶碗		柱穴９	Pit93	○	○	78	並	砂礫含む	5Y8/1	底のみ	
87	山茶碗		柱穴１０	Pit62	○	○	-84	良好	並	5Y7/1	底２分の１	
88	山皿		柱穴１１	Pit133	○	○	-50	並	砂礫少し含む	2.5Y8/1	底２分の１	
89	山皿		包含層		78	17	47	良好	黒色粒子含む	5Y8/1	完形	
90	山皿		包含層		85	22	48	並	砂礫含む	5Y8/1	完形	
91	山皿		包含層		83	17	55	良好	黒色粒子多い	5Y8/1	完形	

Tab.2　瓦

№.	器種	遺構名	調査時記号	広端幅㎜	狭端幅㎜	長さ㎜	厚さ㎜	焼成	胎土	色調	残存度	備考
9	平瓦	土坑１	SK06 №８	―	286	―	32	普通	密。砂礫多い	2.5Y7/1	狭端側のみ	受熱
12	平瓦	土坑２	ST03	―	―	―	28	不良	普通。砂礫含む	7.5Y7/1	一部残	
33	平瓦	土坑３	SK05 №20	―	―	―	29	不良	砂多い	2.5Y7/3	一部残	

Tab.3　石製品

№.	器種	遺構名	長さ㎜	幅㎜	厚さ㎜	石質	残存度	備考
92	砥石	包含層	-68.6	37.5	24.5	頁岩またはチャート	欠損	受熱
93	石銙	包含層	-31.3	-18.2	0.65	結晶片岩	欠損	鉈尾あるいは巡方

Tab.4　金属製品

№.	器種	遺構名	調査時記号	径㎜	最大厚㎜	最小厚㎜	残存度	備考
65	八稜鏡	柱穴１	Pit67	95.5	5.3	1	完形	酸化著しい

Tab.5　土製品

№.	器種	遺構名	調査時記号	長さ㎜	幅㎜	厚さ㎜	焼成	胎土の特徴	色調	残存度	備考
59	土錘	土坑９	SK09	64	13	13	良好	精良	2.5YR6/6	完形	

Ⅳ　まとめ

鈴鹿川沿岸における古代駅路は依然不明なままであるが，伊勢国府から伊勢国分寺方面へ直線的に至っていたとするならば，当遺跡はその経路に比較的近い場所に位置している。

今回の調査により古代から中世までの遺構と遺物が検出された。過去の分布調査や第１次調査などでは古墳・鎌倉時代の遺物や遺構が知られてきたが，ちょうどその空白にあたる時期の集落の存在が明らかとなった。東西に長い調査区内において東半では８世紀後葉の遺構が卓越し，中央からやや西寄りには平安後期の遺構がまとまって見られ，西半では鎌倉時代の遺構が集中する。古墳前期以降，やや場所を変えながら断続的に集落が営まれた結果であろう。中世の遺構面の上部には基本層序で述べたとおり，人為的なクロボク層が厚く堆積しており興味深いが，その由来や形成過程の詳しい説明は今次の調査ではなしえなかった。

伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）周辺における同時期もしくは近接する時期の集落遺跡は今の所明確ではなく，当遺跡における概期の遺構・遺物の検出は基準資料になりうるものである。土坑１・３・５・７の土器類は古代における良好な一括資料と云える。

土坑３では土師器類が豊富で，これらに製塩土器が加わり，その反面須恵器は少量である。他の遺構においても須恵器は比較的少ない。土坑３に限っては祭祀に使用された器物の廃棄用ととれなくもないが，土器の耐久性や消費量に関係すると考えた方が自然であろうか。

これら土器類に混じって出土した瓦片はその出土量から屋瓦として使用されたものとは云えないため，補助的な建築部材として他所から持ち込まれたものと考えられる。古代官衙・寺院周辺の集落遺跡で瓦類が出土することはごく一般的であり，長者屋敷遺跡や川原井瓦窯跡など瓦類が多出する遺跡に由来するものであろう。造瓦や官衙造営等に徴用された徭丁等によって搬入された疑いもある。

鉈尾または巡方の一部と判断される石銙の出土は当集落における律令官人の直接的ないしは間接的関与の結果であろう。緑釉陶器や八稜鏡の出土からも『和名類聚鈔』に見られる「高宮郷」の中核的な集落であった可能性が高い。ちなみに高宮郷は，藤原宮跡や平城宮跡出土木簡にある「高宮里」や「高宮郷」の記載からこの頃まで遡る郷名と考えられる。

八稜鏡を含む和鏡は従来経塚等の祭祀関係遺跡から出土するのが一般的であったが，近年の調査例の増加により集落遺跡からの出土も増えつつある (1)。三重県では和気清章氏による集成があり，この時点で 164 面の出土例が知られる。その大部分はやはり祭祀遺跡出土のもので，中世墓出土のものが若干あり，集落遺跡のものは５例紹介されている (2)。これらには包含層出土のもの，中世墓の可能性のある土坑出土のもの，溝出土のものがあるが，当遺跡のように小穴出土の例は知られていない。

さてこの小穴は柱穴の可能性があるもので，八稜鏡の出土は地鎮祭を思わせるが，建物のまとまりは把握できなかった。ここではその形状から柱穴として報告するが，柱穴とは別個に設けられた小土坑である可能性も高い。いずれにしても何らかの祭祀に関わる行為があったことは確かである。

よく似た出土状況を示す例としては北新町遺跡（大阪府大東市）の花枝双鳥文鏡がある。後世の削平の可能性があるものの，柱穴様の単独の小穴から出土したものである。この遺構は，建物の柱穴，建物に関わる埋納遺構，あるいは建物とは関係のない祭祀・儀礼によるものなどの可能性が指摘されている (3)。

一方，明確に建物の柱穴から出土したものには長岡京跡左京第 53 次の八稜鏡がある。出土位置は南に１間の廂を持つ２間×４間東西棟掘立柱建物の身舎西妻中央柱穴掘方である (4)。この例は地鎮関係の祭祀・儀礼による例と判断される。

その他にも建物に伴う形で完形の銅鏡が出土する例は多数あり (5)，近年でも大友西遺跡（石川県金沢市）や下芝五反田Ｉ遺跡（群馬県箕郷町）などで出土があった。これら全てが埋納とは云えなくとも，柱穴状の小穴から出土する例に限っては，建物築造後の埋納や構造物廃絶時の遺棄や埋没時の混入が考えられない場合，地鎮に代表される建築関係の祭祀・儀礼と関連づけて解釈することが可能である。

今回の調査地点では十分に建物のまとまりが把握できなかったが，出土遺物の内容から見て，国府関連集落のひとつであったと評価したい。

註

(1) 菊池誠一 1987。

(2) 和気清章 1990　P29 ～ 34。

(3) 中逵建一 1994。埋土の様子から柱穴では無く，埋納土坑とする方が

妥当であるとの私信もいただいた。

(4) 長岡京市教育委員会 1985　P161 〜 162。

(5) 菊池 1987。

参考文献

長岡京市教育委員会 1985『長岡京市文化財調査報告書』第 14 冊

菊池誠一 1987「平安時代の集落遺跡出土鏡の性格－東日本の出土例を中心に－」『物質文化』49

和気清章 1990『中尾垣内遺跡発掘調査報告』

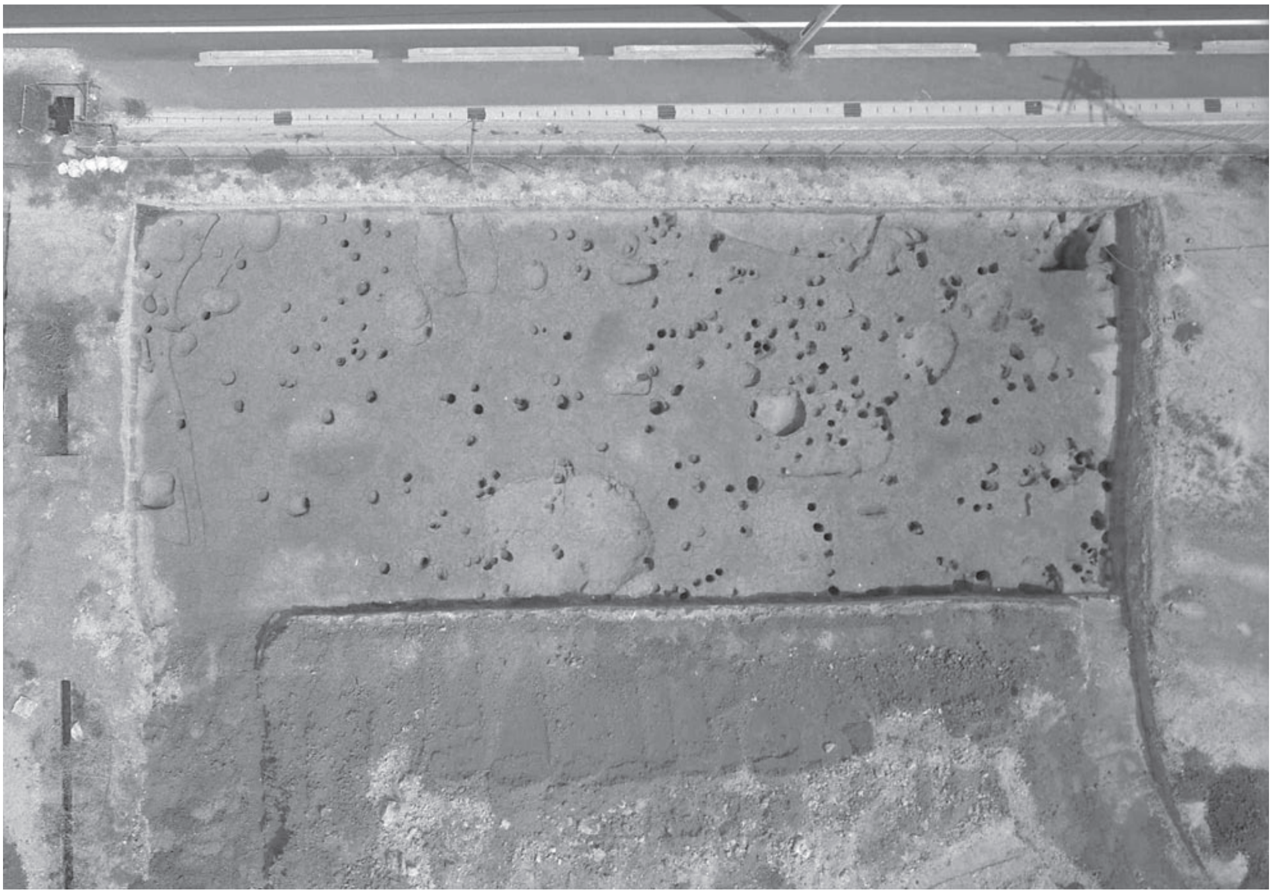
中逵建一 1994「大阪府大東市北新町遺跡出土の和鏡について－鎌倉時代の埋納例－」『祭祀考古』第 2 号

写真図版

調査区全景　垂直

調査区全景　南から

調査区西半　垂直

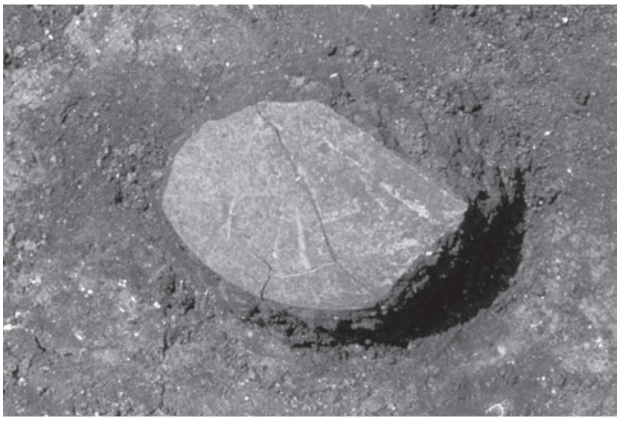


調査区東半　垂直

調査区全景　東から

竪穴建物 1　南東から

竪穴建物 1　南から



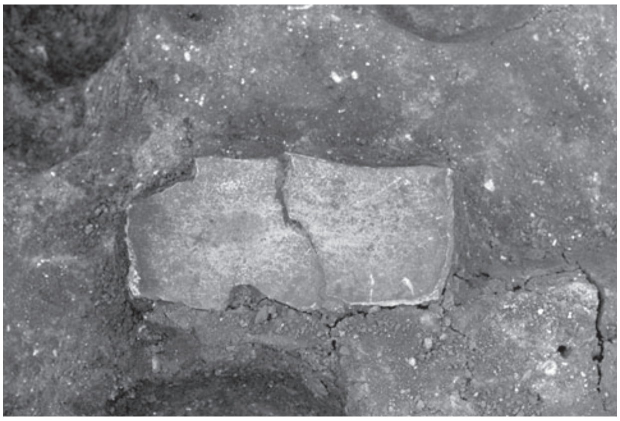
竪穴建物 1 遺物出土状況　東から

掘立柱建物 1　西から

土坑 1 作業風景　西から

土坑 1 作業風景　南東から

土坑 1 作業風景　東から



土坑 1 遺物出土状況　北から

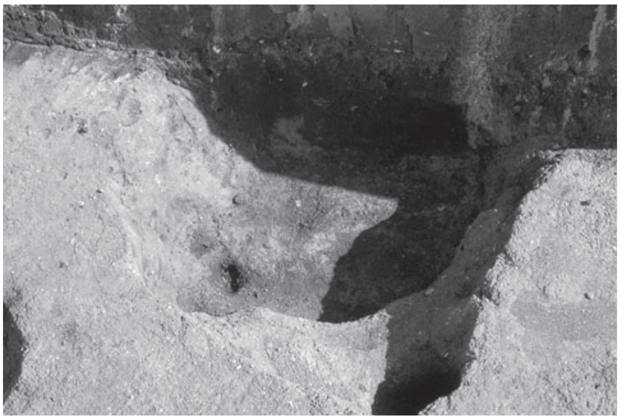
土坑 1 遺物出土状況　東から

土坑 1 遺物出土状況　東から

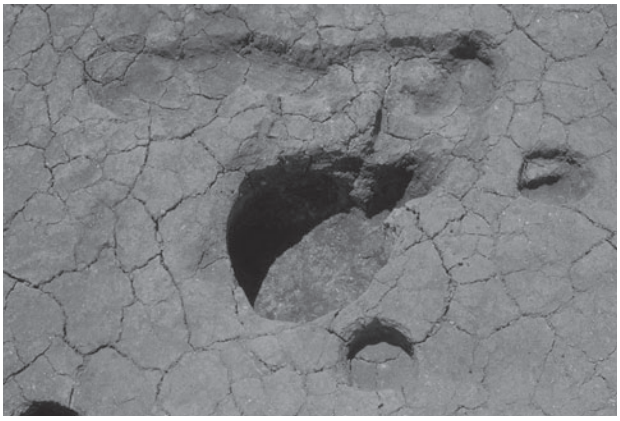
土坑 4 遺物出土状況　東から

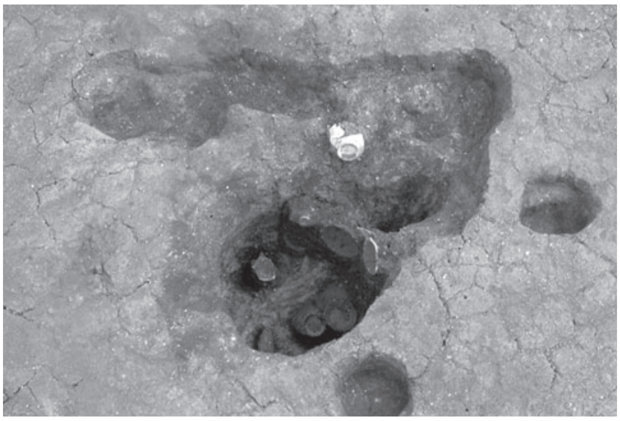
土坑２　北から

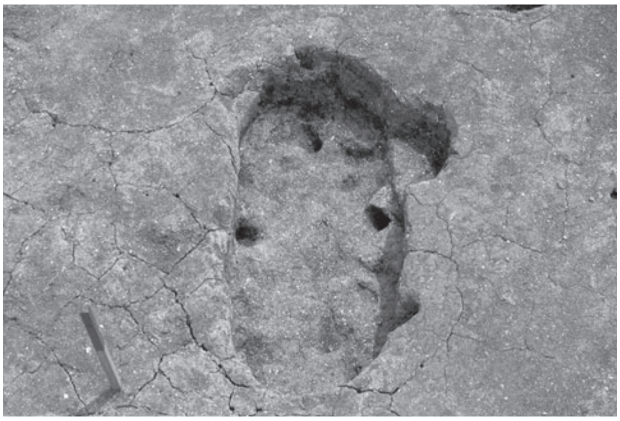
土坑２遺物出土状況　南から

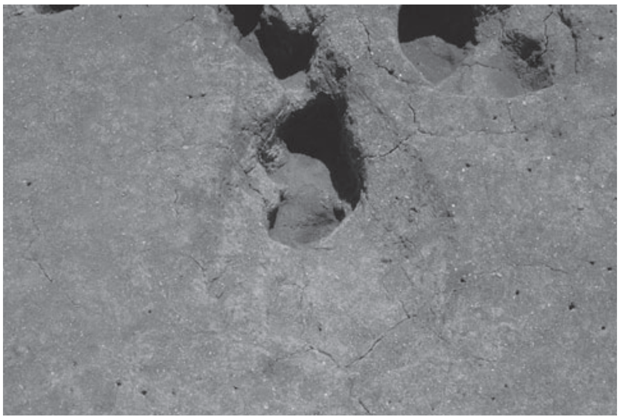

土坑３　北から

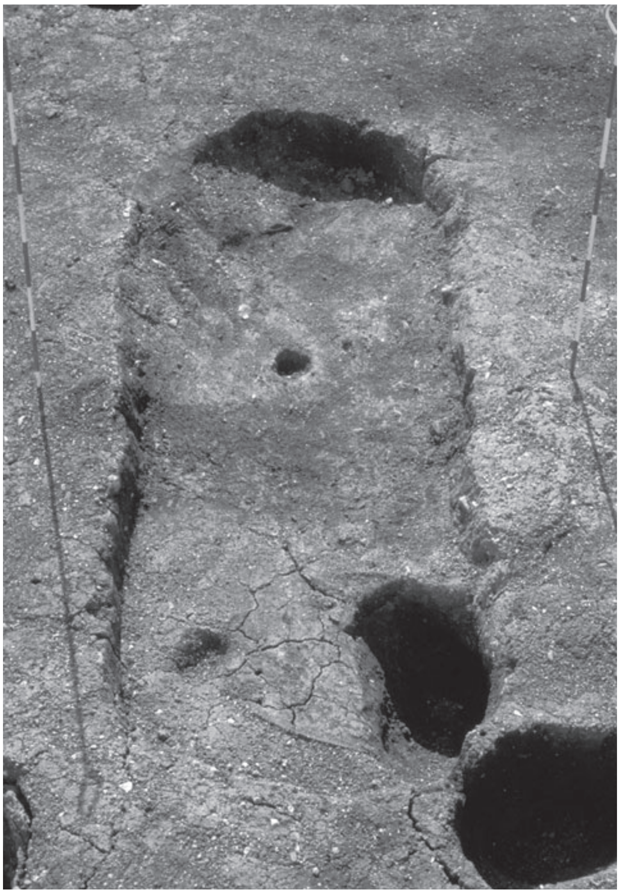
土坑３遺物出土状況　北から


土坑５　北から


土坑５遺物出土状況　北から


土坑６　北から

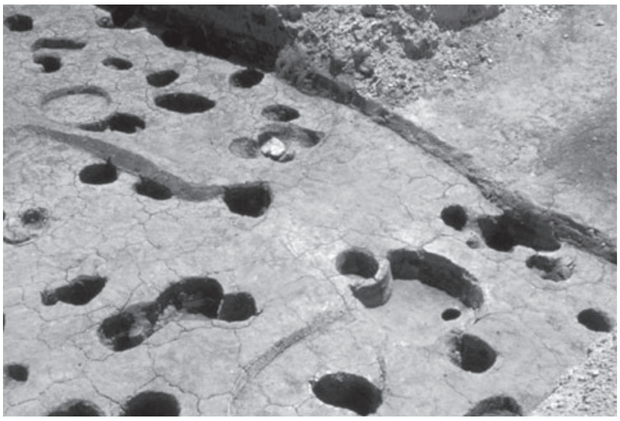

土坑７　西から



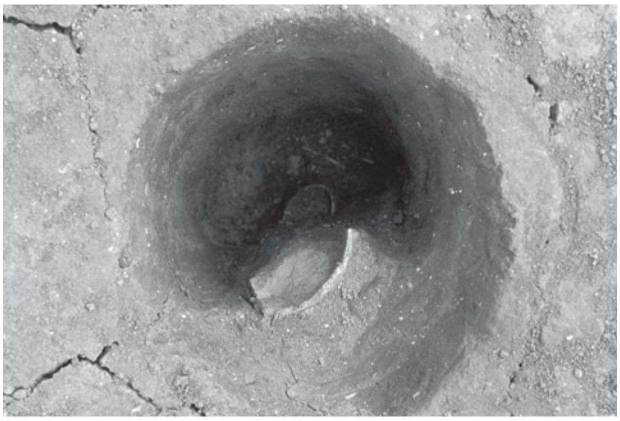
土坑８　東から

土坑９　南から

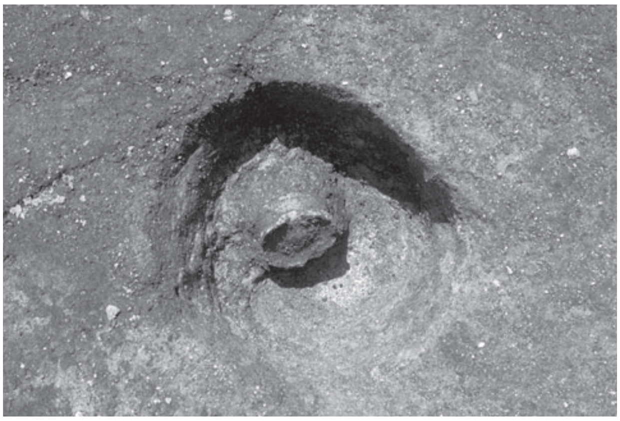
土坑 10　北から



掘立柱建物３　北西から

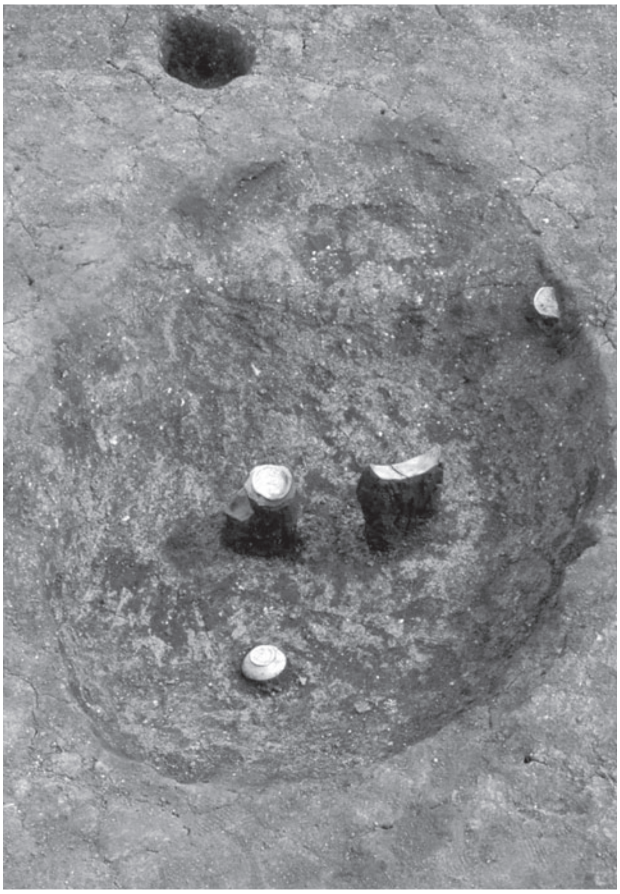


柱穴９遺物出土状況　北から

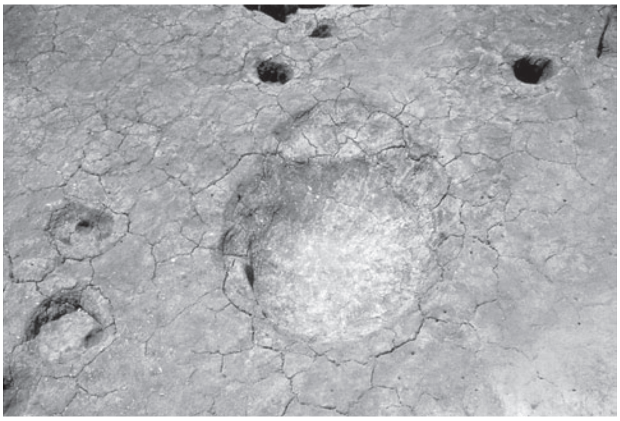


柱穴４遺物出土状況　北から

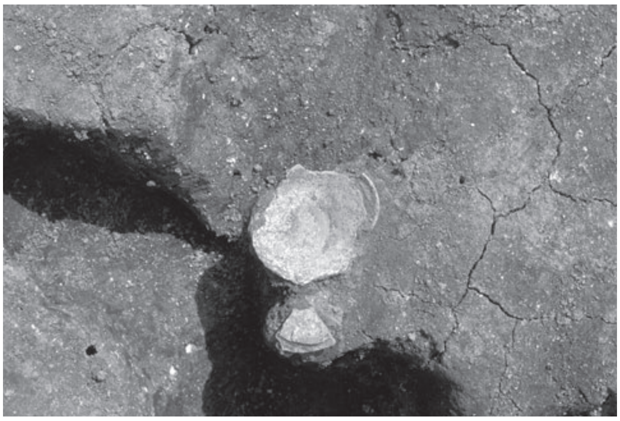
柱穴３遺物出土状況　北から



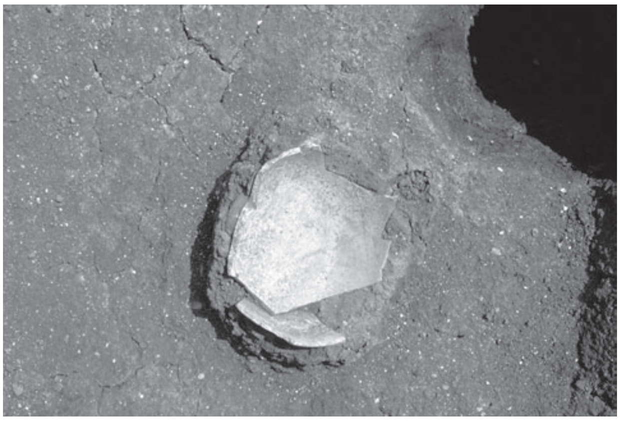
土坑 11 遺物出土状況　北から



土坑 11　北から

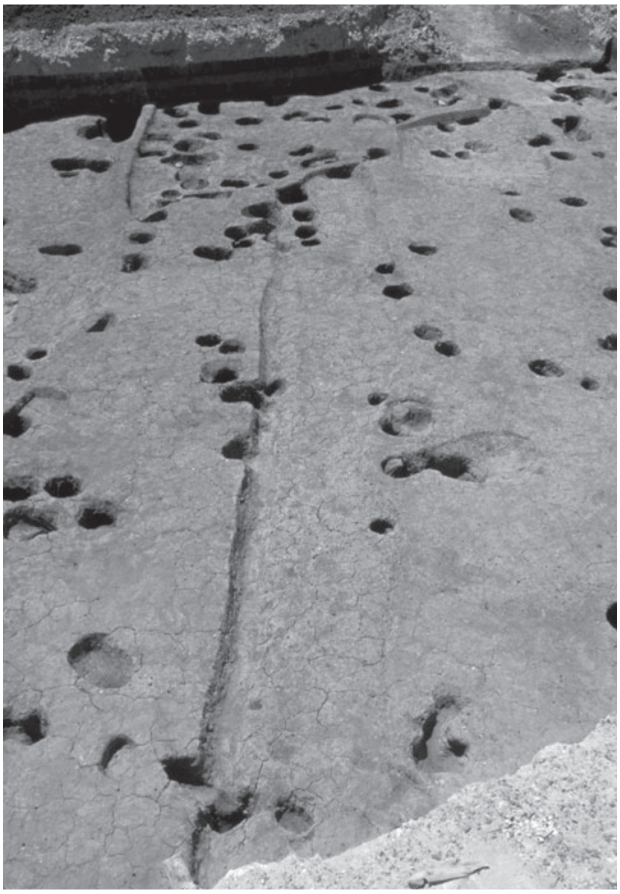


溝 2 遺物出土状況　北から



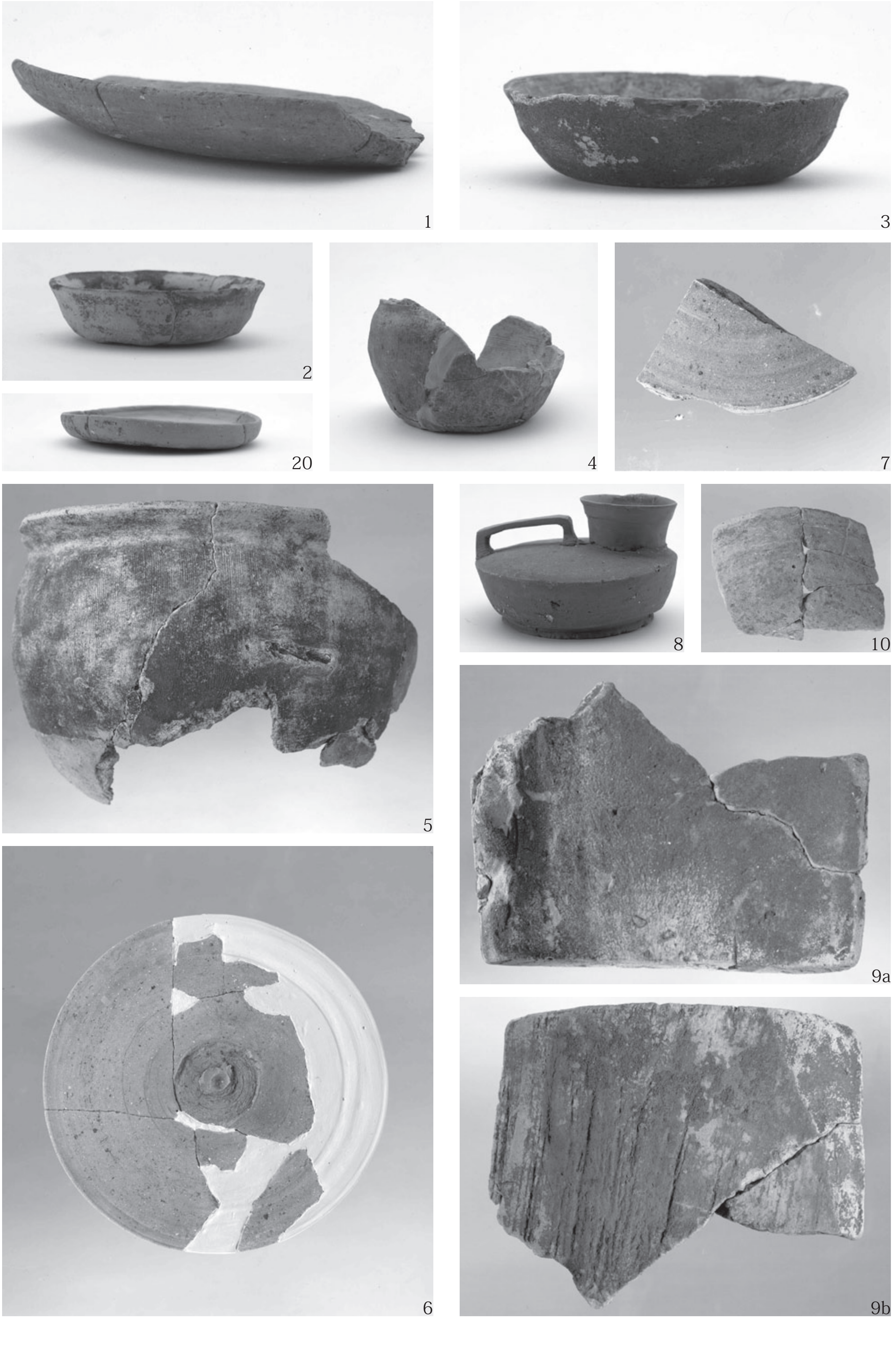
溝 2 遺物出土状況　北から

溝 2 作業風景　北東から



溝 2　北東から

Pl.8

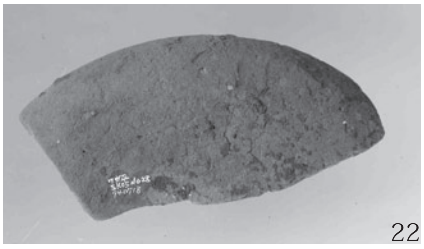


11

12a

12b

15


22

13

14

16

17

19

21

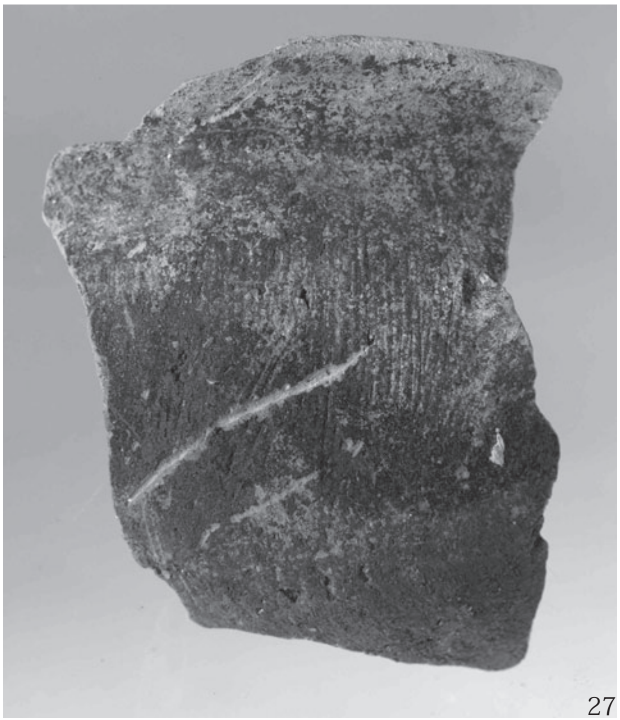
18

23

24

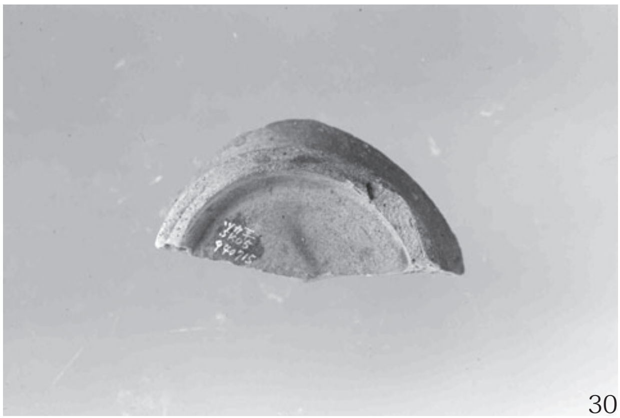
25

26

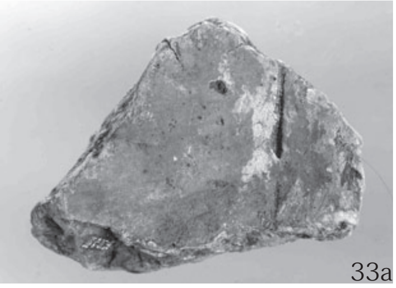

27

28

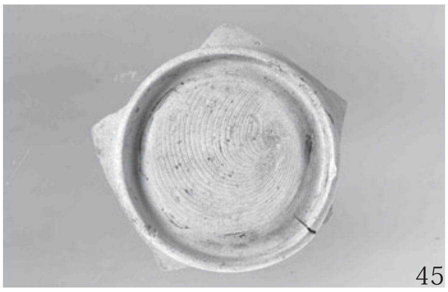
29

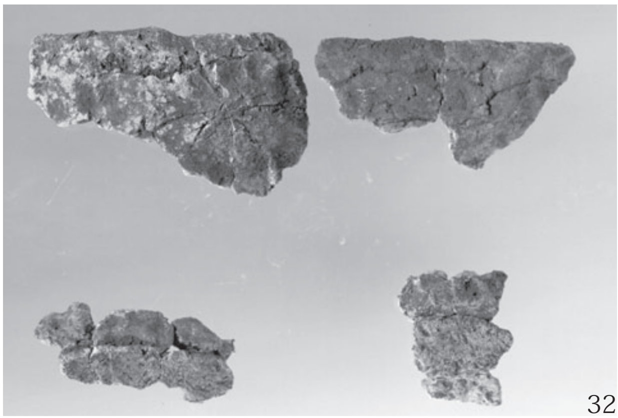

30

31

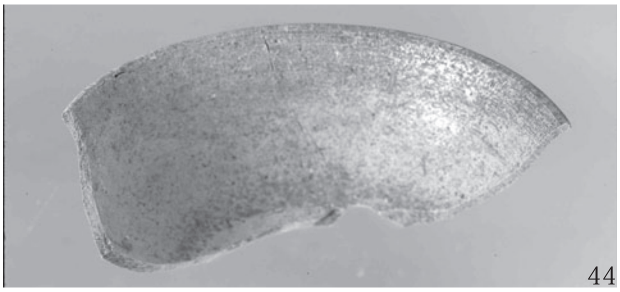

33a

33b


45


32

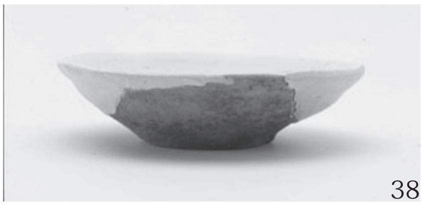
34


44

35

36

37


38

39

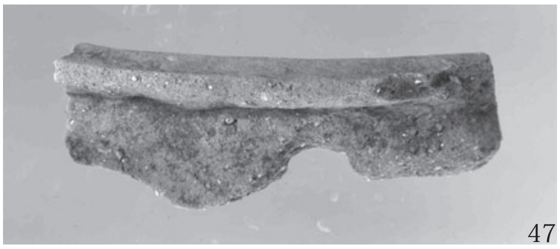
40

41

42

43

46


47

48

49

50

51

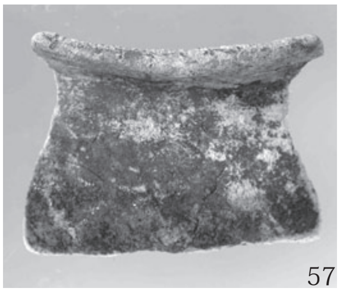
52

53

54

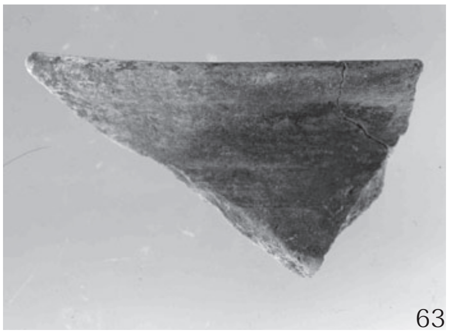
55

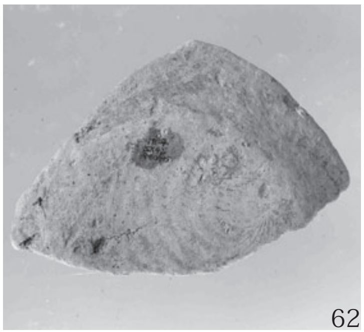
56


57

58

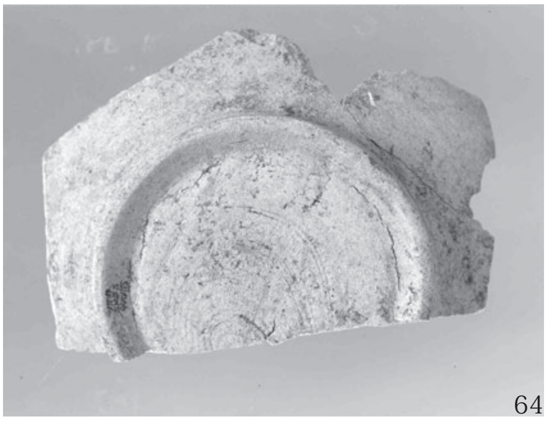
60

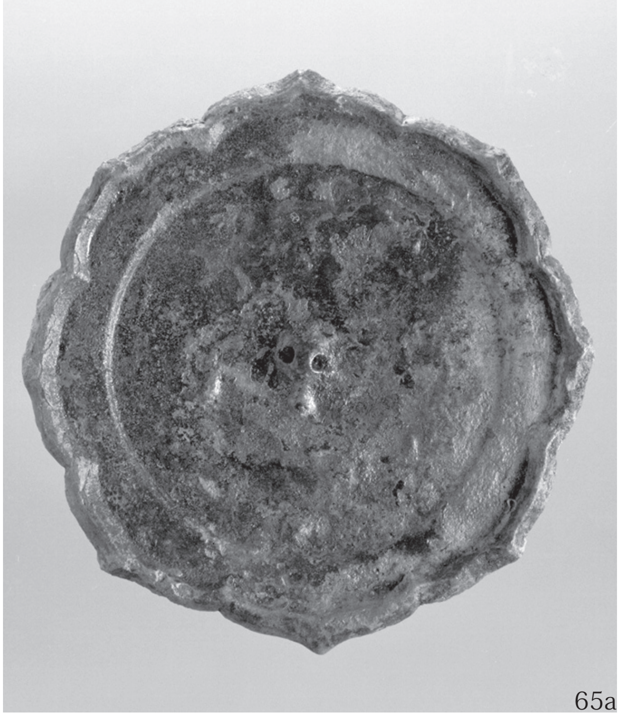

63

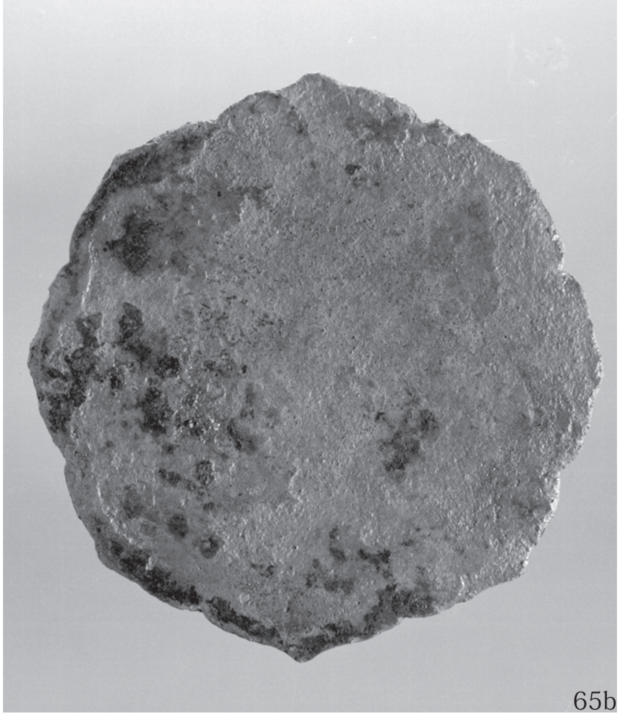

62

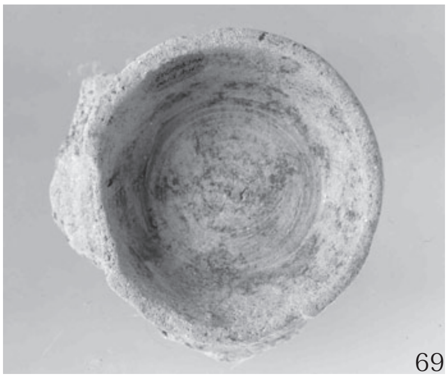
59

63

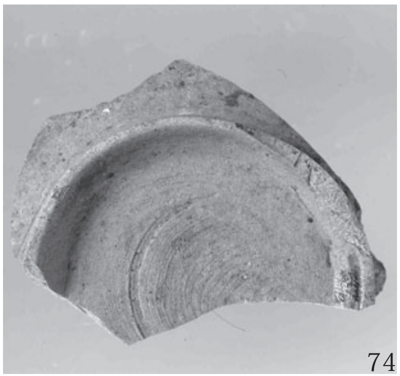

64


65a


65b

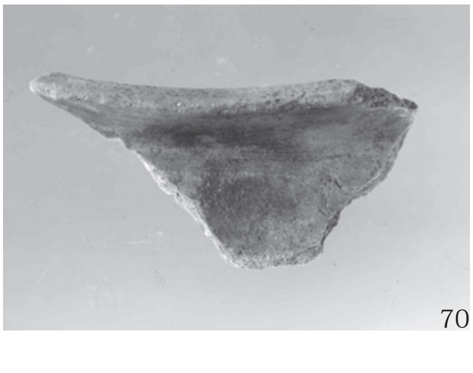

69

72


74

67

68


70

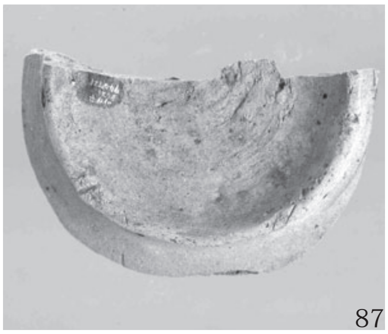
71

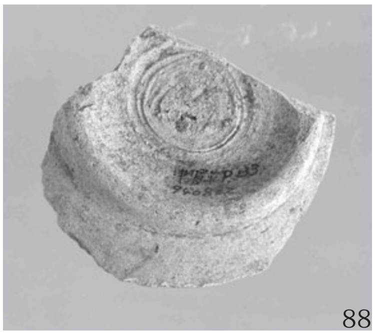
73

66

86

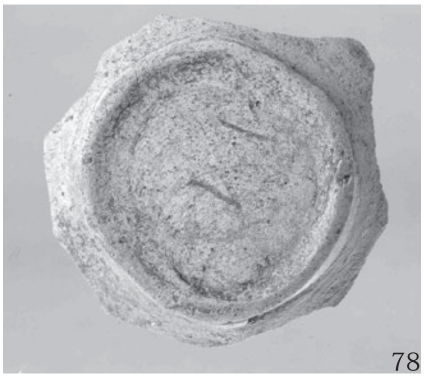
85


87


88

75

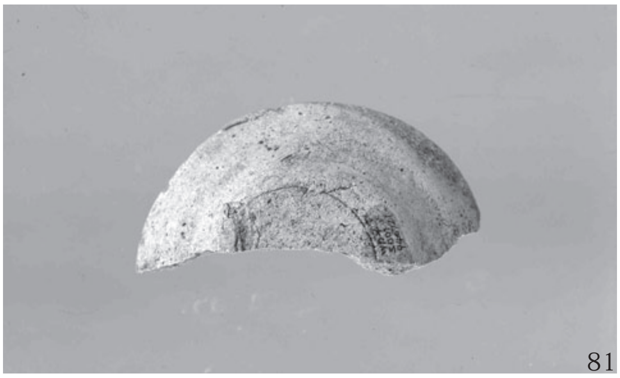
76


78

77

79

80


81

82

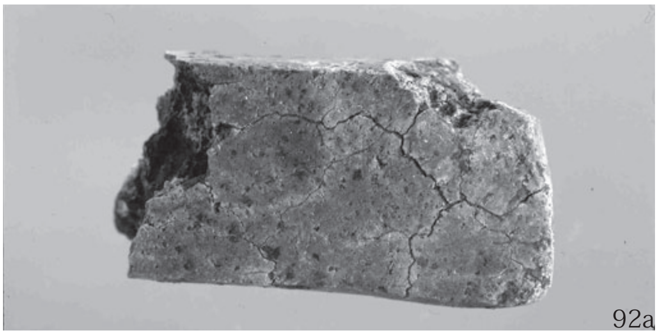
83

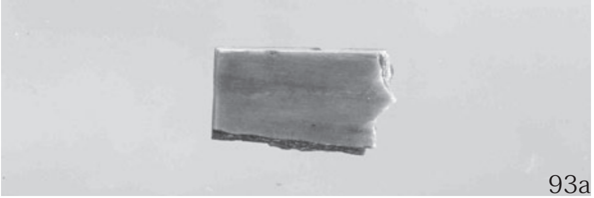
84

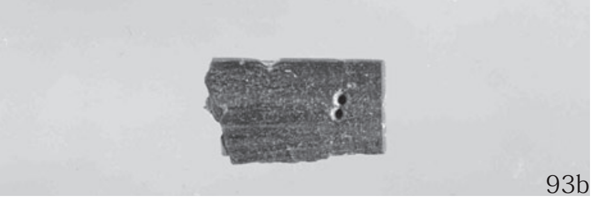
89

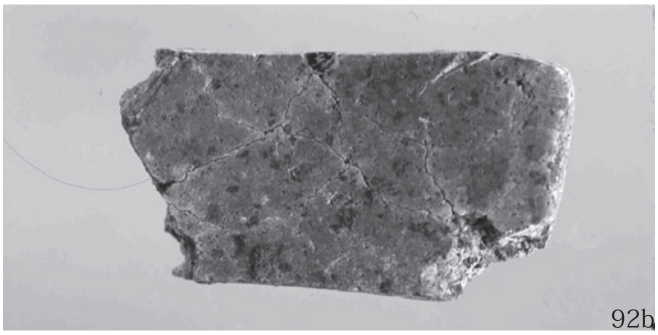
90

91


92a


93a


93b


92b

Tab.6　報告書抄録

ふりがな	つがだいらいせき
書名	津賀平遺跡－第 2 次発掘調査報告書－
編著者名	新田　剛
編集機関	鈴鹿市考古博物館
所在地	〒 513 － 0013　三重県鈴鹿市国分町 224 番地
発行年月日	西暦 2010 年 8 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
津賀平遺跡	三重県鈴鹿市津賀町字池ノ坪 807 番 1・807 番 3・807 番 4・809 番 2・809 番 4・809 番 5	24207	522	34° 53′ 20″	136° 31′ 2″	19940704 ～ 19940819	570㎡	農業関連施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
津賀平遺跡	集落	古代・中世	竪穴建物・土坑・溝	土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・瓦・石銙・八稜鏡・土錘・砥石	古代・中世の土坑等が検出され，良好な一括資料が得られた。

津賀平遺跡－第 2 次発掘調査報告書－

発行日　2010 年 8 月 31 日

編集・発行　鈴鹿市考古博物館

〒 513-0013

三重県鈴鹿市国分町 224 番地

TEL　059（374）1994

FAX　059（374）0986

e-mail：kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp

URL：http://www.edu.city.suzuka.mie.jp.museum